

---

# 疾風の翼

疾輝

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

疾風の翼

### 【Nコード】

N3304S

### 【作者名】

疾輝

### 【あらすじ】

突然現れた少女との出会いで変わってしまった日常。

そして作られたひとつのギルド。

彼らは何を思いそして何を成すのか……

ファンタジー小説を目指す予定ですが作者は文才が無いので駄文と  
思いますがよろしく願います。

## 登場人物紹介（前書き）

ヒロインの名前も出たところで、登場人物紹介をしたいと思います。  
まだ、書いてないところもありますですがそれは追々。  
これから読み始めるひとまどうぞよろしくお願いします。

## 登場人物紹介

名前：サイキ・レーゲン

性別：男性

職業：魔法剣士

属性：風

本作品の主人公。

ラファエルユネル  
ギルド疾風の翼のリーダー。

レイビア  
得物は細剣を使い、剣を主体とした戦い方を好む。

ギルドのまとめ役的な存在。

とあることで、シャルを助け今までの生活が変わってしまう。

名前：シャントリーネ・カルラ・ヒュラセルン

性別：女性

職業：巫女

属性：光

ある理由で、テンブル騎士に追われていたが、サイキに助けられ疾  
フェイルユネル  
風の翼に加入する。

サイキからシャル、と言うあだ名を貰い、皆からもシャルと呼ばれ  
ている。

巫女という珍しい職業でパーティの回復役を勤める。

基本、誰に対しても敬語を使い礼儀正しいが、一般常識が抜けてい  
たりと天然。

名前：ニムラール・レヴァネール

性別：男性

職業：アルケミスト

属性：風、水

ギルドーしつかりしているサイキの幼馴染。

物を作るアルケミストという職業で、さまざまなアイテムを作る。

何事にも真面目で、モンスターの知識も多く、ギルドの知恵袋的存在。

水の属性と風の属性のハーフなので、2つの属性が使える。

名前：カイツ・プロンタタ

性別：男性

職業：盗賊

属性：火

何事に対しても、軽いノリで接してくるサイキの幼馴染。

戦闘では、2つの小刀と素早い動きで相手に大ダメージを与える。

小さい頃、火の国から移住してきたためサイキたちとなじみが深い。

名前：シルラ：レーゲン

性別：女性

職業：狩人

属性：風

弓を使い、遠くの相手をしとめる狩人でサイキの従妹。

誰に対しても活発な態度を示す。

態度とは裏腹に根は優しく、サイキとシャルの関係を影ながら応援

(?)している。

## 登場人物紹介（後書き）

このほかに後2人くらい出したいと思います。

そっちは書いてから付け足すので、楽しみにしてください。  
感想・アドバイス等何かありましたらよろしく願います。

## プロローグ（前書き）

これからよろしくお願いします。

## プロローグ

マギ・ミイル それは剣と魔法の世界

8つの国々が支配し、それぞれが伝統を受け継ぎ栄華を誇っていた。

国ごとに規則、法律、商業が異なり人々はその中で生活していた・

・  
・  
・

「やっと終わった・・・」

サイキは細剣<sup>レイピア</sup>を切り払い鞘に収めた。

サイキの前には、全長1メートルくらいの虫の死体がある。

固体名ウイングワーム、芋虫をでかくしたような形をしている。

今回のクエストはコレを狩れというものだった。

「さて、帰るか・・・」

サイキは任務完了とばかりにうなずき、もと来た道を帰っていった。

## 帰還（前書き）

本編に入ります、よろしくお願ひします。

## 帰還

門をくぐるとすぐに、人々の喧騒にあった。

それらを無視して、目的の場所にたどり着くとサイキは手続きを済ませた。

「よし、コレで終了」

あとは、機械が勝手にやってくれる・・・、そう思い辺りを見渡した。ここは同盟、アライアンス人々がクエストを受けたり、逆に出したりする場所だ。人々が仕事を頼みに来たり、それを見に来る傭兵やギルドの面々でいつもここは人で溢れている。

そのほかにもここでは食事も出していて、そういう人たちだけでなく一般の人も気楽に来れるようになっていた。サイキは目的の人物を見つけるのと同時に後ろで音があった。

手続き完了の文字が出るとその場を後にしさつき見つけたテーブルに近づいていく。テーブルには2人の先客がいた。1人は男、1人は女だ。

「おそ~~~~い!!!!!」

と、女の方から声がかかった。

彼女はシルラ。サイキの従妹でよくサイキたちとパーティを組んでいる。

肩までの桜色の髪が特徴的な少女で、背中には彼女の武器である弓をさげていた。

「おそいって・・・まだ予定時間前だろ、それにカイツもまだ来てないんだし」

と行って、席に着く。

「まあ、カイツが遅れてくるのはいつものことだし」

ともう片方の男が困ったように言う。

彼はニム。サイキと幼馴染で、職業はアルケミスト。まだヒーラーがいないサイキたちのパーティでポジションを作ってくれている。

「わりい、遅くなつた〜〜」

と大して気持ちの入ってない声で言っつて、男が入ってきた。

彼はカイツ。最近サイキのパーティに入ってきた男で、ここに来る前は火の国にいたのだという。

「ちょっと、遅いじゃないのー!」

シルラがサイキのときと同じように言った。

「何だよ、少し遅れただけじゃねーか」

反射的に、カイツが言い返す。

この2人はもともと馬が合わないのだ、初めにあったときからそうだった。今も二人でぎゃいのぎゃいの言い争っている。

「二人ともー、そろそろ話しに入りたいですけど」

そしてそれを止めるのがニム。いつものことであった。

「んで、話つて何よ、しょーもないことで呼び出したんじゃないで

しょうね」

シルラが話をふった。

そして、それまで黙っていたサイキが口を開いた。

「んーと、今終わったクエのほかにもうひとつ受けているんだ。ちよつと一人では無理だから、明日手伝って欲しいんだけど・・・」

と言つて、クエストの紙を皆が見えるようにテーブルの中心においた。

内容は、風の国から少しはなれたところにノーテラス平原というところがある。そこに出てきた飛行形モンスターを倒して欲しいとの事だった。

「飛行形つてだけなのが気になりますね」

ニムが言った。彼は、モンスターの生態にも詳しい。いつもならモンスターごとの対策をしていくのだが、飛行形というだけでは彼もさすがに分からないようだった。

「あー、どうしてこんな面倒なの行かないといけないのかしら、まあいいけど」

めんどくさそうにシルラが言った。

「ギルドを組めば、もう少しいいのができるんだけどな・・・」

カイツが呟くように言った。この世界には即席で組むパーティのほかに、ほとんど同じパーティで組むギルドというものがある。サイキたちもいつも同じ面子で組んでるのでギルドを組んでもいいのだ

が、問題点があつて、組めないのだ。それは何か、簡単だ。人数が足りないのだ。ギルドを組むには最低でも5人必要になる、しかしサイキたちは4人しかない。

他の人を入れるにも信頼がないとダメなのでサイキたちはギルドを組めないでいた。

ギルドを組むと様々な特権があり、受けられるクエストが増えるのだ。

「ないものねだりしても仕方ないさ、みんな手伝ってくれるってとこでいいんだな？」

サイキを除く全員がうなずいた。

「じゃあ、今日は解散しよう、明日の準備があるだろうし」

そうサイキが言ってその日は解散したのだった。

そのクエストが今の生活をがらりと変えてしまうとは知らずに・・・

## 帰還（後書き）

感想・アドバイス等お願いします。

困惑（前書き）

2話です。

## 困惑

「お戻りください！・・・様！！」

先頭に立った一際大柄な騎士が叫んだ。鉄の甲冑に身を包んだ城の騎士たちだ。

「すみません、今は戻れません・・・」

申し訳なさそうな声が闇の中から響いた。そして、闇の中にいた人影は颯爽と消えていった。

「追えー！！まだ近くにいるはずだ、絶対に探し出せ！！」

その声をあげ、騎士たちは逃走者を追うのであった・・・

---

サイキが準備を整え、集合場所の同盟（アライアンス）に行くところにはもうニムがいた。

今は、今日のクエストで使うポーションなどを製造しているらしく、こちらが近づいても気づいていない。今声をかけると集中力が途切れるだろうと思い、サイキは無言で席に着いた。

すると、たったたと軽快な足音が近づいてくる。シルラだ。彼女は近づいてくるといきなり

「おっはっよ~~~~~!!!!!!」

と大きな声で言った。いや、叫んだの方が正しいかもしれない。

その瞬間ニムの前のポジションが、ぼふんと煙を上げた。製造に失敗したのだ、まあ、あの大声の中集中力を保てるとは思わない、自分でも無理だろう。

がばつとニムが顔を上げると、シルラがてへへと笑っている。

「いつも言いますが、製造中は話しかけないで下さいって言うてるじゃないですか。まだ簡単なポジションだったからいいですけど……」

ニムがまったく言う風に首を振る。毎回のことなので、いい加減うんざりしているようだ。

「あ、サイキもいたんですか。静かにしていただいて有難うございます。シルラにもコレくらいの気持ちがあっても……」

ニムがぶつくさと言う。隣ではシルラがあいさつは大切じゃないのよーと言っている。

「カイツはまた遅刻ですか。先にポジションを配っておきますね」

そう言ってポジションを配り始める。サイキもそれを貰い自分のポーチしまう。そして、自分の分をしまい終わったシルラがぴよんと立ち上がり、

「んじゃ、いこっか」

と言って出て行こうとした時、後ろからどたどたとうるさい音が響いた。そちらを見てみると、少し先をカイツが全力疾走してこっちに向かっているのが見える。

「ちよつと待ってくれー」

と大声を上げて近くで停止する。シルラもそうだがこんな朝っぱらから大声を出して近所迷惑ではないのかとサイキは思う。マナーはしっかり守るべきだ。

うんうんとサイキが頷いていると、ニムがカイツにポーションを放り投げる。それを器用に受け取り、仕舞っていた。ともかくコレで全員揃ったのだ、ここで時間を潰す必要も無い。

「それじゃあ、行こうか！」

サイキたちはそう言ってノーテラス平原へ向かった。

パーティを組んでいたこともあり、ノーテラス平原に行くのは難しくはなかった。そして30分もしないうちに現場へ到着した。

ここノーテラス平原はそこまでモンスターの数も多くな、商業人たちの移動経路にもなっている。尤もこの先には大きな山脈があり（サイキは山脈名は覚えてないが）そちらのほうがたくさんモンスターが出る。そして、その先に光の国があるのだ。光の国から来る人々からしてみれば、ここまですれば安全と言う場所になっているだろう。

あたりをキョロキョロ見回していたカイツが言った。

「何にもいねーけど・・・ほんとにここで合ってるのか？」

と言って彼の武器である短剣をしまう。

「もう、どこかに移動してしまった可能性もありますしねえ」

とニムが残念そうに言う。自分が聞いたことのないモンスターだったのを見てみたかったようだ。

とその時一番後ろを歩いていたシルラがぱつと後ろを振り向く。

「後ろから、なんか来るわ！！！！」

彼女の声はなぜか若干疑問形になっていた。サイキも振り向くと空から黒紫の羽が生えたモンスターがこっちにむかって飛んでくるのが見えた。

「なんじゃ、ありゃ・・・」

サイキもシルラの言葉の意味が分かった。なぜなら、そのモンスターは一度も見たことがなかったからだ。

## 困惑（後書き）

感想、アドバイス等よろしくお願ひします

## 戦闘（前書き）

3話目です、サブタイトルがもっとかっこいいのにしたいけど思いつかない・・・  
では、どござ

## 戦闘

視界に入ったモンスターは、羽を持った、黒紫のモンスターだった。

「あれは、・・・ウインドガーゴイルですかね？でもあのモンスターは深緑色のはずだし・・・」

ニムが瞬時に判断し、そう言った。確かに形状はガーゴイルに似ている。しかし、とサイキは思った。

ウインドガーゴイルの色違いだったとしても、こんなところに出るはずがない。ガーゴイルが出るのは、もっと奥のはずだ。しかし、絶対にここに来ないという確証は無い。何かの手違いで来た、と結論付けてサイキは細剣を鞘から出し、構えた。

もうガーゴイルは遠距離攻撃の射程に入っている。

「来るぞー!!」

そうカイツが言って戦闘が始まった。

まずシルラが動いた。得物の弓を構え、矢をつがえ、撃つ。これをガーゴイルは右に大きく動いて避けた。そこへカイツが飛び込む。彼の職業は盗賊だ、軽い防具しか装備できない代わりに移動速度に長けている。その長所を生かして、ぐんぐん敵との距離を縮めそして、飛び上がる。

その時だった。ガーゴイルのからだの前に中位の紫の球体ができていた。

しまった、魔法だ、と思ったときにはもう遅い。球体はカイツに向かって発射され、空中で身動きがと思うように取れないカイツに命中した。かれはその勢いそのまま地面に衝突した。

「なっ・・・アレは闇属性の魔法じゃないか」

ニムが驚きつつも、援護するために魔法を詠唱し始める。

どすと鈍い音がした、そのときにはサイキはもうカイツの落ちた場所に駆け寄っていた。

「カイツ！大丈夫か！！」

そう叫び、カイツの前に立つ。攻撃がカイツに向かわないようにするためだ。

「おう、大丈夫だ！でもすまねえ、体力がかなり減ったから回復するまで前衛頼むわ」  
フオワード

ポーションは万能ではない。詠唱が完了した瞬時に体力が回復する魔法とは違い、ポーションはじわじわと回復する。そのため、本来は戦闘後に使うアイテムのだがサイキ達のパーティには回復魔法が使える人がいないので、ポーションで回復するしかない。

そしてニムも、シルラもアルケミストと狩人だ。前衛に出れるほど守備力は高くない。

よって、カイツが回復するまでサイキ一人で前衛を支えなくてはならない。

「〜〜相手を妨害し、動きを奪え、麻痺よ！」  
パラライズ

ニムの麻痺が決まる。アルケミストは直接ダメージを与える術よりも相手を妨害する術が多い。

それに構わず、ガーゴイルはサイキに向かって爪を振るってくる。

サイキはガーゴイルの爪を弾いて、一歩下がり魔法の詠唱を始めた。サイキは魔法剣士だ、それぞれのプロフェッショナルには適わない

までも、剣と魔法の両方を使える。  
シルラがそれに合わせて矢で牽制をかけてくれる、そしてサイキの詠唱が完成した。

「〜〜敵を切り裂く真空の刃となれ、ウインドカッター！」

サイキの放った真空刃がガーゴイルに襲い掛かる。ガーゴイルは体をひねり、直撃こそ避けたものの、翼を切り裂かれ、地面へ落ち始める。

サイキは距離を詰め、一気に切りかかる。ガーゴイルは避けようとしたが、体が硬直した。

麻痺を受けていたせいで体の動きが一瞬止まる。そこで最後の一步を詰め、サイキは剣を振り下ろした。

「これで、どうだ！！！」

今度こそ、ガーゴイルの体に直撃した。ガーゴイルの体を真っ二つに切り裂きそのまま着地する。

ガーゴイルの絶叫が響いた。そして力尽き、どさつと倒れた。

「終わったか・・・？」

サイキが呟く。そして彼以外が

「そーみただねー、はぁーつかれた」

「結局俺のいない間に終わっちまったがな」

「あのモンスターを調べてきますね」

と、三者三様の答え方で返した。それを聞いてサイキも細剣を鞘レイピアに入れた。シルラとカイツが座り込んでいる中、ニムは、死んだモンスターに対して魔法をかけていた。相手の情報を分析する魔法だろう。

サイキもモンスターについては気になっていたので、ニムの元に向かった。

「どうだ？何か分かったか？」

と、サイキが言うと、ニムも情報収集が終わったらしく、こちらを見て今のモンスターの情報を出した。

「思ったとおり、アレはガーゴイルでした。しかし、ダークとなると闇の国の近くじゃないと出ないはずなんですけど・・・それにあの魔法も闇属性でしたし」

サイキはニムが提示した情報を覗き込んだ。名前はダークガーゴイル、闇属性の中級モンスターだった。

しかし、それはおかしい。各国々の近くにいるモンスターは、属性がその国と同じである。つまりこの辺りにいるモンスターは全て風属性のはずだ。もっとも、闇の国は隣の光の国をはさんだ反対側に位置する国だ。こんなところに闇属性が出るわけが無いのである。

「これはどういう事なんだ？とりあえず、アライアンス同盟には報告した方がいいよな？」

サイキが言うとニムもその通りだと言うように頷いた。こんなところに闇属性のモンスターが出たと言うことだけでも大事だろう。その上、ガーゴイルと言うもつと奥に行かないと出ないモンスターがでたのだ。

「ニム、その情報シルラとカイツにも見せてやってくれ」

そう言うと、ニムはシルラとカイツの元に向かっていった。

サイキはまだモンスターがいるかもしれないと思いあたりを見渡した。

ノーテラス平原は元の姿を取り戻したかのように、静かに風が吹いていた。辺りにモンスターはいない。そう確認したところで、サイキはニムたちのところへ戻ろうとし、ふと視界の隅に何かが移った。山脈の方だ。入り口付近で煙が上がっている。商業者たちかとも思ったが、すぐに否定した。まだ昼間から煙を上げる必要もないし、夜を明かすならここまで来てからにするだろう。

残る理由は1つ、煙を上げている者が何かに襲われているのだ。

「皆、山脈で誰かが襲われている！救助に向かおう」

それを聞いて皆準備をし始めた。皆の準備が終わった頃に

「行こう！急がないと」

とシルラが一足先に駆けて行った。サイキたちも後を追う。

山脈のモンスターはまだサイキたちには倒せないだろう。しかし、戦わなくてもいいのだ。襲われている人を救助すればいい、分かっているのに見殺しにはできない。

そう思いサイキ達は山脈へと疾走するのであった……

それが運命をかえる出会いの始まりだった。

## 戦闘（後書き）

感想・アドバイス等何かありましたらよろしくお願ひします。

遭遇（前書き）

4話です。

## 遭遇

サイキ達がついた頃にはもう煙は消えていた。

「こつからは、手分けして探そう。あと目的は救助だ、深入りはしないように」

サイキが言うとニムが球状の何かを渡してきた。そういえば、向う途中何かを作っていたような・・・

「通信用のアイテムです、一人一つずつ作っておきました。じゃ」

といて、手渡した後透明化インヴァジブルの魔法を使い、回りの景色と同化していった。

ニムのやつ気が利くなあと思っていると、シルラもカイツも隠密を使い消えていった。

「何もできないの俺だけか・・・」

そうはいつでも仕方が無い、そう気持ちを切り替えてサイキも山脈に足を踏み入れた。

10分ぐらい足つただろうか、山脈を幾ら歩いても何も無い。いや、何かがいた形跡はあるのだが、その本人が見つからない。ニムから渡された球状の物体からも何の音沙汰もないので、誰も遭遇してないのだと思う。

もう、平原へ逃げ切ってしまった後なのだろうか？一度皆と連絡をとってみようと思ったそのときだった。

丘の下から声が聞こえてきた。どうやら、戦闘中ではなく何かを言い争っているようだ。

サイキが見つからないように覗いてみると、男が3人に女が1人見えた。いや、女の方は少女といった方がいいか。男たちは同じ形の豪華な鎧を身に着けていた。見た目だけでなく性能もいいのだろう。それに対して少女の方は軽装で、御伽噺に出てくるような服装をしていた。

そして、その少女と男たちが言い争っているようだった。

「もう逃げられませんかよ、さあお戻りください」

3人の中心にいた男が有無を言わせぬ口調で言った。

「いやです！まだ私にはいかなくはいけないところがあります！」

少女の方も負けじと言い返した。

サイキは今、自分はどうすべきか考えた。俺が探しているのは、煙を出したものであってこの人たちとは関係が無い。だがしかしこの少女が煙を出したということも考えられないくもないし……結論、まずはこの少女を助けて、そして事情聞けばいいか。なんか困ってるようだし、煙を出した張本人なら一石二鳥だし。

そう考え、サイキは魔法を練り始めた。魔法は、使うときそのときに詠唱しなければいけないわけではない。先に練っておいて、使いたいときに術名を言えばいいのだ。まあ、練っておける時間には限度があるが。

そして男たちが動いた瞬間、サイキは丘から飛び降り魔法を唱えた。

「ウインドカッター！」

風の刃が男たちに襲い掛かる。しかし、男たちが盾を掲げると盾に触れた瞬間魔法が消失した。

その隙に男たちと少女の間に着地する。

「何者だ！テンプル騎士に魔法を放つなど！返答しただいではただでは済まさんぞ！」

男が叫ぶ。と同時にサイキの疑問が氷解した。テンプル騎士は魔法を打ち消す能力を持っている、そのためサイキの魔法が消えたわけだ。

しかし、それは魔法が消えたときから予想していた。そのため、消えた瞬間もうひとつの魔法を練っていた。テンプル騎士は攻撃的魔法はかき消せるが、この魔法はそうはいかない。

「いや、少女1人に男が3人がかりで捕らえようってのが気に入らないのでね！！シャインユニーク！」

辺り一帯が光と音に包まれた。そう、この魔法は音と光で相手の視覚と聴覚を一時的に奪う魔法だ。無論、後ろの少女は巻き込まないよう調整してある。

そして、この隙を逃すわけも無い。

「ちよいと失礼」

「えっ、あつ。きゃあ！？」

いきなり抱きかかえられて少女が悲鳴をもらすが、今は構っていない。

男たちに背を向け、脱兎のごとく逃走する。このまま戦ってもこちらに勝ち目は無い。

ある程度はなれたところで、腕の中の少女に話しかけた。

「煙をまいたのは君かい？」

少女はまだ、警戒しているようだがごくんと頷いた。

ビンゴ！助けてよかったと思ったサイキだったが、今まで連絡をしてないことを思い出した。

「えっと、山脈から煙が上がってるのを見て俺らは救助にきたんだけど……」

それを聞くと少女ががばつと身を乗り出して聞いてきた。

「あなた達が来たのは、もしかして風の国の方からですか!!」

いきなりの態度の変貌に一瞬たじろいだが少女の質問に答える。

「そうだけど、どうして追われてたの？」

サイキが聞くと、少女は少しためらいがちに答えた。

「それを話すのは少し長くなります……」

## 遭遇（後書き）

感想・アドバイス等何かありましたらよろしくお願ひします。

## 理由（前書き）

5話です。

ヒロインの名前出しました！

この小説読んできると作者の好きな小説とか分かります。  
では、ごきげん。

## 理由

「それを話すのは少し長くなります……」

ためらいがちに、少女がそういった。

サイキは皆にも説明したほうがいいだろうと思いい、球状の物体を取り出した。

ふと気がついたが、彼女は軽い。サイキの片手で支えられる体重なのだから。コレがシルラなら……その先はいわないでおこう。

「救助者が見つかった、入り口で落ち合おう」

とだけ言って通信を切った。続いて少女に質問をする。

「話すのは、みんなのところに着いてからでもいいけど、君は一人で山脈を越えてきたの？」

もっともな疑問を聞いた。すると少女は、もう一度こくと頷いて、

「山脈までは、一人できたんですけど降り始めたあたりで追っ手に見つかって……」

コレには驚いた。自分と変わらないか少し下の少女が護衛も付けずに山脈を越えてきたのだ。サイキでも一人で越えるのは困難だろう。

「すごいな……えーつと……」

「シャントリーネと言います」

「シャン・・・少し呼びにくいな。シャルじゃだめか？」

「あ、は、はい。構いません。えっと・・・」

「サイキだ。サイキ・レーゲン」

「サイキさんですか、改めて先ほどはありがとうございます」

「サイキでいいよ、それに何か理由があるんだろ？」

そうこういつてる内に、山脈の入り口付近に着いた。よく見ると、皆もつ戻っているようだ。

「おそいよ〜って、何であんた知らない女の子お姫様抱っこしてるのよ?？」

とシルラが言っつて、初めて抱えたまま走っていたことにきがついた。サイキとシャルはそろって顔を赤くした。

え、だって緊急事態だったし、この方が早いし・・・などと言い訳を考えたが、何一つ言葉に出なかった。とりあえず、急いでシャルを降ろし、話を無理やりそらすことにした。

「えっと、彼女シャルっていうんだけど、いろいろ訳ありらしいんだよ。とりあえず、ここを離れた方がいいから一回風の国に戻ろう」

皆、理解できたわけではなかったが真面目な話だと言うことは分かったので、サイキの指示に従うことにした。シルラはあとできちんと教えなさいよーとニヤニヤしていたが、そのまま、サイキたちは平原を後にした。

「で、どういうことなんですか？」

とニムが聞いてきた。

場所は、サイキの家に移してある。初めは同盟アライアンスで話を聞こうと思ったのだが、シャルの服があまりにも人の目を引くので、ここに移動したのであった。シャルも今は、普通の服に着替えてある。サイキとシルラは一緒の家で、別々の部屋で生活している。そのため、シルラの服を貸してもらったのであった。

いろいろあって、よっくと見ていながったがこうして見るとその、シャルは結構かわいかった。

（服変わっても変わらないな、いやこっちのほうが可愛いか、ああ、もう何言ってるんだ、いやお世辞とかじゃなくて本心であああああとサイキは心の中で悶絶しながらシャルの話に耳を傾けた。

「じゃあ、話しますね……」

シャルが話し始めたのは、考えていたよりもずっと深刻な話だった。

## 理由（後書き）

感想・アドバイス等何かありましたらよろしくお願ひします。

## 偽装された真実（前書き）

7話です。

そろそろ第1章が終わります。  
では、どうぞ。

## 偽装された真実

「えと、まず私の名前から。サイキさんには話しましたがシャントリーネと言います」

シャルは優雅な仕草で一礼した。  
すると、ニムが質問をはさんできた。

「シャントリーネだけですか？姓は？」

それはサイキも聞いていなかった。しかし、シャルは困ったような素振りをみせ、

「すみません、ちょっと姓まではいえません」

この答えニムは疑いの眼差しをむけたが、サイキが横から割り込む。

「まあ、いいじゃないか姓なんて。シャントリーネだから、略してシャルで十分」

と、シャルのフォローをする。なぜかサイキはこの少女を敵とみなすことができなかった。

するとそれを見たシルラが聞いてきた。

「どうしてサイキは彼女に優しいのかなあ??もしかして好きになつたとか??」

にやにやと聞いてきた。これにサイキはすぐさま、

「違つて！！シャルはそんなじゃなくて・・・」  
いいかえそうとしたが、言葉が出てこなかった。  
それを見て、シルラはさらに笑みを深め、

「そんなんじゃないくて何なのかな〜？ま、いいや。このままだと話し進まないもんね」

いきなり話を振られたシャルが迷いながらも再開する。

「つぎに、ここまできた理由です」

シャルが話を戻す。よく見るとシャルも顔が少し赤かった。

「皆さんご予想の通り、私は光の国から来ました。それで、目的地はここじゃなくて2つ先にある土の国です」

それを聞いてサイキは思ったことを口に出してしまった。

「土の国までって、護衛もつけずにか？ひとりで？」

すると彼女はこくと頷き、余談だが彼女のこの仕草がサイキは好きだ。

「光の国からはそうでした。でもここまで来るのも結構大変だったので、この国で、護衛でもつけようと思います。あ、話がそれましたね。それで、土の国に着いたら国王様に合つて話をしたいんです」

また、二ムが口を挟んだ。

「何のためにだい？それにたかが一庶民が国王に面会できるとは思わないけど？」

そのとおりだ。風の国ならまだしも土の国は警備が固いことで有名だ。さらにシャルは光の国からきたのである。命を狙う刺客と思われても仕方が無い。

「えっと、面会の件は大丈夫なんですけど、何のためにかはちょっと教えられません」

ますますなぞが深まる。そもそも何故面会はできると断言しているのか。

「あと、最後に皆さんに助けられたお礼にひとつ教えときます。簡単に言えば、隠された真実とでもいうのでしょうか」

シャルは皆の顔を一通り見てから、もう一度話し始めた。

「この世界には8つの国がありますよね。そして国同士で何が起きているかを国民に定期的に知らせなくてはならないと言う義務も」

シャルの言うように世界は光・風・氷・土・闇・雷・火・水の8つの国がある。そして、国同士の関係が一般の人々にも伝わるように1ヶ月に一回、城の前の電光掲示板に国々の情報が分かるように記事が張り出される。

「それが偽られているんです、真実を隠すために」

これには、ニムが反論した。

「そんなことできるわけが無い！なぜならあれは張り出す前に国がきちんと確認しているはずだぞ！」

「だからこそです、ニムさん。これは、国同士での取り決めです。それに何か最近の記事できづきませんか？」

今まで黙っていたカイツが口を開いた。

「いや、特に変わった事はなかったはずだぜ、せいぜい闇の国側の情報が少なくなっただてことぐらいか」

この言葉で、ニムはそうか！と理解したようだ。しかしサイキたちはわからない。そしてシャルが続ける。

「それです、闇の国と通信が途絶えてしまっているんです。ネットワークや、人を送っても見ましたが、結果は同じでした。そのため私は土の国の国王と話があるんです」

しかし、とニムが区切った。

「どうしてそれを君が知っている、そしてどうして国の長達は何も公表しないんだ！」

「国民を怖がらせない無いためでしょうね。あと、私が何故知っているかということは、すいませんがこれも教えられません。これが私が山脈にいた理由です。あ、くれぐれも吹聴はしないで下さいね」

と、シャルがはなし終わる。もちろんそれだけではテンブル騎士には追われないだろうが。

そして立ち上がり、ペこりとお辞儀をする。

「助けていただいて有難うございます。これ以上お世話になるわけには行かないのでこれで失礼します」

と行って、部屋を出て行くとする。それを呼び止めたのはサイキだった。

「えっと、俺らといっしょに行かないか？」

言ったサイキでさえ驚いていた。シャルも驚いたようだったが

「いえ、これ以上は皆さんの邪魔にもなってしまいますし」

と、丁寧に断った。すると今度はふと頭の中に思い出したことを口に出した。

「シャル、身分証明書もってなかったよな。討伐や、採集ならまだしも護衛は身分証明書必要だったと思うぞ。それに護衛なんて受けてくれる人が見つかるまでその場待機だし」

これにはシャルも気づかなかったようだ。あ、と声を上げてから、考え込んでしまう。

なぜかシャルは身分証名書を持っていなかった。風の国では入国に必要な無いが、土の国では必要だろう。あのまま行ってたら国にはいることさえできなかつたのではないか、そうだとするとかなりの天然だ。

「えと、皆さんの邪魔にはなりませんか？」

シャルがためらいがちに聞いてきた。

「俺は全然大丈夫だけど皆は？」

とサイキはたずねた。

「ああこれは重症だわ。ま、面白そうだし私はいいわよ」

シルラが言った。重症の意味は分からなかったが、まあOKだそう  
だ。

「新しい情報も入りますしね、大丈夫ですよ」

「俺はお前らがいくんならついてくぜ」

と、全員が承諾した。

それを見てシャルがためらっているようだったが、はっきりと

「じゃあ……よろしく願います！！」

## 偽装された真実（後書き）

このごろ学校が忙しくて2日に1回の投稿になるかもしれません。  
その時はよろしく願います。

感想・アドバイス等何かありましたらよろしく願います。

## ギルド結成（前書き）

とりあえず人物紹介のあたりまではかけたのではと思います。  
では、どうぞ。

## ギルド結成

シャルが言った後、ニムが問題点を言った。

「つぎに身分証名書ですね。土の国に行くならこれは必要でしょう」  
身分証明書は自国でないと再発行できない。しかし、例外なら何個かあるはずだ。

「ほかには、その国の上位貴族になるかギルドを作ってギルドごとの身分証明書を出すかだな」

カイツが言った。上級貴族になる方法は少なくとも移籍して3年たないといけないので却下。

ギルドのほうは5人以上必要だからこれも無理か、ん？

「シャルをギルドメンバーに入れるってのはどうだろう？」

シャルのメンバーに入れれば、5人になって、ギルドを作れる条件に一致する。

しかし、戦闘ができないシャルをギルドの一員と数えるのには少し無理があった。

それを見透かしたようにニムが言った。

「戦えない人をパーティに入れるのはどうかとおもいますが、その分危険も増えるわけです」

すると、驚いたことにシャルが反論した。

「えっと、わたし皆さんの援護くらいはできますよ。巫女ですし」

これには皆が驚いた。カイツが皆の疑問を代表して言った。

「巫女ってあの光の国のエクストラジョブか？なれる人間はかなり少ないって聞いたことがあるんだが」

カイツの言ったとおり、その国々ごとしかなれないエクストラジョブという職業がある。風の国では飛行士とかその国に関係するものが多い。その中でも光の国の巫女はなるのが一番難しいと呼ばれる分類にはいつている。ちなみにサイキが敵対したテンプル騎士もそのひとつだ。

「はい、その巫女ですよ。攻撃手段は無いですけどね」

巫女と言う職業は自ら攻撃する術は全く持ち合わせていないものの、それを差し引いてもおつりが来るくらいの回復・支援魔法が使える。と言うことを聞いたことがあった。

「とはいっても、まだそこまで上位魔法は覚えてないですけど。簡単な援護はできますよ」

それを聞いて、サイキは思案した。

（もしかしたら、シャルをパーティに入れたら逆に戦力強化できるんじゃないか？）

「もう一度言うけど、シャルを入れてギルドを作らないか？」

ニムもそこに行き当たってたようで頷いた。

「おお、やっと俺たちのギルドが作れるのか、新しい仕事も受けられるようになるし、俺は大賛成だぜ」

カイツも了承してくれた。

シルラにいたっては乗り気なようで、早速こんなことを言ってきた

「ね、ギルドを作るんだったら、立派な名前が必要じゃない？どうするの？」

ギルドの名前、これは大切だ。ギルドは一度名前を決めたら、もう変えられない。どうしても変えたい時は一度ギルドを解散して、もう一度作り直すしかない。

「そうねえ、ウイングアローとかどうかしら？」

「それだと、なんか全員狩人みたいじゃないか、却下だな。他に何か無いか？」

と言ったものの、カイツはかつこよければいい、ニムは名乗りやすければ何でもいいということで特に希望は無かった。サイキは、さつきから話していないシャルに話を振ってみた。

「シャルはなんかいいの思いついたか？」

いきなり話を振られたシャルはふえ？とかかわいい、いやいや驚いた声を上げた。

「えっと、私なんか決めていいんですか？さっきであったばかりなのに」

「いって、そんなこと気にしなくて」

それを聞いてしやるがおずおずと言った。

「ええっと、翼つてのが気に入ったのでこの国の名前もかけて疾風ラファールの翼ルユネルなんてどうでしょうか」

「疾風ラファールの翼ルユネル……いいんじゃないか、皆はどう思う」

サイキがそう聞くと皆も気に入ったようで賛成と全員が言った。シャルだけがえ？え？と戸惑っている。

「それじゃあ、俺たちは今日から疾風ラファールの翼ルユネルな。他に決めることってあつたっけか？」

「あとはギルドリーダーを決めるだけだと思います。私はサイキがいいと思いますが」

「な！？おれか？ニムの方がよっぽど適任じゃ……」

それに言い返したのはカイツだった。

「言いだしつpegやるもんだぜ、だからサイキがやるべきだ」

それに合わせてシルラもうんうんと頷いている。

のこったシャルに顔を向けてみると、大きくこくと頷かれた。同やら勝負あつたようだ。

「わかったよ、俺がやる。その代わり、俺一人ではできないこともたくさんあるからみんな手伝ってくれ」

サイキはそういって、ふと思い出したことを言った。

「そうだ、皆に話すことと、シャルに聞いておきたい事があるんだが」

そういって、シャルを見る。シャルも意思を汲み取ってくれくれたようでした。了解の意思を表す。

「俺がシャルを見つけたとき、シャルはテンプル騎士におわれていたんだ。何故だと理由は聞かない、その代わりもう一度追ってくる必要があるのか聞きたい」

この話には驚いたようだった。シャルが話しを引き取る。

「気遣い、有難うございます。それでその質問の答えは、ない。と言いたいんですが、多分追ってくるでしょう」

「じゃあ、次に奴らが何時ごろ来るかは分かるか？」

「えっと・・・サイキさんを見つけたので一度国に帰ってからになるとは思いますが・・・」

それ続けたのは二ムだった。

「大体の日数なら計算できますよ。シャルさん、貴方がここまで来るのに何日かかりましたか？」

シャルは一瞬思索したが、すぐに答えた。

「シャルでいいですよ。山脈にたどり着くまで3日、サイキさんと会ったのがそれから半日です」

「では戻るのに4日、取って返すのに4日でしょうか。彼らも休まないで来るとは思えないので少なくとも二週間は大丈夫ですよ」

二週間か、すぐに出発しなくてもまだ余裕はあるようだ。

「そこで提案なのですが、一週間この国でギルドの生活になれて、その後出発と言うのはどうですか？」

とニムが言った。サイキはこれについて思索してみた。確かにニムの言うとおりである。シャルの疲れもあるだろう。ここは少し余裕を持つべきだ。

「じゃあ、ニムの提案を呑もうと思う。明日から一週間、このパーティになれてその後、出発しよう。皆それでいいか？」

シャルもどうやら賛成のようである。次に話したのはカイツだった。

「あのようサイキ、俺ギルドを作ったら絶対受けないクエストがあったんだが、いいか？」

「ああ、でも初仕事なんだから余り難しいのは辞めとけよ」

「おう、わかったぜ」

あっちではシルラとシャルがはなしている。

「ねえ、シャル。貴方、服あれしか持って無いでしょう？明日買い

に行かない？」

「え、でもわたしお金持って持ってないですし」

「いいのよそれくらい。ねね、行い」

ガールズトークが始まっていた。きゃいきゃいしたのはサイキはついていけないので、ニムに話しかける。

「ニム、ギルドを作るには同盟アライアンスに行つて登録受付すればいいんだよね？その際の書類なんだけど・・・」

「分かってますよ、こまごましたのは私がやります。カイツも付いて来て下さい。ああ、貴方たち二人は残つてて大丈夫ですよ」

そういつて、サイキたち三人は同盟アライアンスに行つてギルドを結成した。

サイキはその場で書く必要事項を書いた後、こまごまとした書類を貰い、同盟アライアンスを後にした。ニムが後は引き受けてくれるといったので、今日はここで解散したのであった。

## ギルド結成（後書き）

感想・アドバイス等何かありましたらよろしくお願ひします。

## 外1 買い物（前書き）

えっと、外伝作ってみました。

これは読み飛ばしてもらっても本編には支障ありません。  
では、平凡な一日をどうぞ。

## 外1 買い物

サイキは布団に包まり、くかーっと寝息を立てていた。

いつもなら、もう起きなければいけない時間なのだが、昨日の疲れが残っているのかまだ起きる気配は無い。

ふと、扉が開いて小柄な影が入ってきた。木枠をきしませつつ窓を開く音がする。

影はサイキのすぐ横にひざをつき、てをんおばすと彼の体を揺さぶった。

「・・・う~~~~・・・もう少し・・・」

サイキはのろのろと手をのばすと、相手を布団の中に引きずり込んだ。

「きゃあー！」

軽い悲鳴が上がった。それをサイキは、半分以上寝ぼけた頭で聞き流す。

布団の中から必死で這い出た少女は、顔を赤くしながら何度か深呼吸吸した。

「サイキさん、朝なんですけど・・・」

更に揺さぶられて、サイキは仕方なく目を開けた。そして、自分を起こしに来た人影をぼけつと見上げた彼は、一瞬の空白の後、突然目を開くとがばりと跳ね起きた。

「わあああつー！」

そして、文字どおり飛び起きた。

「おはようございます」

にっこり微笑まれて、サイキはばくばくと全力疾走している心臓をなだめつつばやいた。

「・・・シャルが起こしてくれ無くてもいいのに・・・」

よく見ると彼女も顔が少し赤い。記憶をよみがえらせるとサイキは平に平伏した。

「じっ、ごめん」

「いえ、大丈夫です。それに私は居候させてもらってる身ですから、家事くらい手伝わないと」

「いや、そうじゃなくて・・・いえ、いいです」

俺を起こすのは家事なのかと疑問に思ったが、サイキはため息混じりに降参した。

シャルは昨日いろいろ訳あってであった少女だ。泊まるところが無いのでサイキの家に居候している。

「えっと、わたし下に行つて朝食の準備してますね、準備終わつたら来て下さい」

と行ってとてととと部屋を出て行った。

彼女は結構気が利いてかわいい、いやいやとにかく、気が利くのだ。

そう無理やり思考をそらした、しかし目をあけたらシャルがいる、という状況は、まだ心構えができていないので非常に心臓に悪い。

とりあえず準備をしながら、今日の予定を思いだした。

今日はシャルの買い物に付き合う予定だった。別に軽装でいいだろうと思い、準備を整える。

そして、階段を下りていくともう朝食はできているらしく、シャルとシルラが何かを話していた。

シルラはサイキの従妹で同じ家に住んでいる。

彼女はサイキを見つけると、にやにや笑いながら話しかけてきた。

「おっはよー、どうだった？寝起きシャルは」

お前の仕業か、と思ったが声には出さない。適当な返答をしつつ、椅子に座り朝食をとった。

そして、食事後のドリンクを飲んでいたときにシルラが言った。

「今日は、ニムもカイツも来れないって。ニムはギルドの書類があるらしくて、カイツはギルド初の仕事を選ぶからーだそうよ。というわけで、サイキ。あなたは付き合いなさいよ」

有無を言わせぬ口調だった。ニムはともかく、カイツは裏切ったな。昨日前々から行きたいクエは決まっていたとか行ってたくせに・・・。とはいえ、逃げ出せる雰囲気ではないのでサイキは今日2度目の降参をする。

「わかったよ、荷物もちになればいいんだろ・・・」

結局はこうゆうことだ、女子の買い物に男子が付き合わされるときはこの理由くらいしかない。

シルラはそれでよしと満足そうに言っていた、やっぱりそうだったか・・・  
気持ちを切り替え、サイキは昨日から思っていたことをシャルに言った。

「シャル、俺には敬語は使わなくていい。敬語使われるとなんか距離感あるきがして・・・」

シャルは驚いたようだったが、

「分かり・・・分かった、サイキ・・・」

としどろもどろになりながらも答えた。自分たちに敬語を使っているのではなく、もとから敬語で話してたので、言いくらいようだった。

「無理はしなくてもいいから、そこんところ意識しといてくれ」

「おー、少年少女の若き青春の一ページみたいですねー」

と、シルラが野次を入れる。

「ちがうつつつつ」

つい、シャルとハモってしまった。そういえばシャルはシルラに対しては普通に話してるみたいだけど。

女の子同士理解しやすいのかななどと考えていると、ニヤニヤ笑いつつシルラが元気よく言った。

「じゃあ、行きましょっか！」

買い物は生活用品から始まった。初めからシャルの服を見るのかと思っていたが、違うようだ。女心はよつくとわからない。

これは特に時間がかかることも無く、早く終わった。早くと言っても、いつもの買い物に比べればだ。

もう時間は、お昼を過ぎてている。今の時点ではまだ片手に荷物が下がってるくらいだ。

一通り見終わった後、シルラが言った。

「そろそろおなかも空いてきたし、お昼にしようか」

と言って、すたすたと道を進んでいく。そしてある店の前で止まった。

シルラが止まった店は結構、いやかなり値が張るお店で、このごろうわさになっている店だ。

そこに戸惑いも無く、入っていく。シャルは何も知らないようで、シルラの後についていった。

サイキは大丈夫なのか？と思いつつも2人の後についていった。

店の中は結構広く見た目も悪くない評判どりの店だった。シルラは1つのテーブルを見つけると、2人を呼んで座った。ここでサイキは疑問をぶつける。

「大丈夫なのか？ここ結構高いと思うんだが・・・」

「大丈夫よ、何でも頼んで頂戴」

「なら、いいんだが」

「お代はサイキ持ちだし」

「なっ!?!」

「当然でしょ、それともあんたは女の子に飯おごらせるのかな?」

どさっ・・・ダメだ、女に口では勝てない・・・その様子を楽しげに見ていたシャルはひとつの料理を指差した。

「じゃあ、これにします」

ぐはっっ・・・よりによってシャルが選んだのはこの店で一番高い料理だった。これを悪意無くやってるのだとしたら、今一番怖いのはシャルなのではないか・・・俺がつぶれてるうちに料理が来たようだ、その品ぞろえを見てもう一度脱力した。そのまま思考は停止した。

「ほら、行くわよー」

シルラに叩かれて目が覚めた。俺は泣く泣くお代を払い店を後にした。出た後にシャルがご馳走様でした。と律儀に言ってきた。ああ、なんていい子なんだ。これで、もうすこし安いものを頼んでくれたらなあ・・・そして買い物再開した。午後はメインのシャルの服選びになるよっだ。

一通り服屋を見終わった後、シルラはひとつの店にシャルをひっぱって入っていった。サイキも入ろうとしたが、シルラに

「あんたはここで待ってなさい、きちんと待ってたらいいもん見せ

「てあげるから」

といわれ追い出されてしまった。疑問に思いつつもサイキは待つことにした。

しかし、問題はその待ち時間の長さだった。とにかく長い、実際は30分くらいだろうがサイキには3時間にも感じた。することも無くなり、ついには魔法のスペル詠唱でもしようか、と考えたところでシルラが出てきた。

「できたよー」

と言ってサイキを引っ張っていく。

訳も分からずされるがままになっていると、ひとつの更衣室の前に立たされた。

「それでは、ご対面で〜す」

と言って更衣室のカーテンを引く。そこには着替えたシャルがいた。

「サイキ、どうかな・・・似合うかな？」

シャルが着ていたのは半袖のホワイト・ブラウス。その下はライトグレーのタンクトップでスカートは上と同様ライトグレーのティアドレススカートという組み合わせだった。

「えっと、かわいいからいいと思うけど・・・」

率直な感想を述べるとうれしかったようだ、シャルはてへへと笑いながら自分の姿を鏡で見ている。

「じゃあ、これ買おうかな・・・」

という流れで、シャルの服選びは終わった。さっきからシルラはニヤニヤしていたが。

その後いろいろ買った結果、両手でギリギリ抱え切れるくらいの荷物になった。

やっぱりこうなるのか・・・

## 外1 買い物（後書き）

どうでしたでしょうか？

感想・アドバイス等何かありましたらよろしく願います。

外2 5人で(前書き)

外伝2です。

ソードスキル

SS出してみました。

これで1章は終わりです。  
では、どうぞ。

## 外2 5人で

サイキ達が行くともうニムとカイツは来ていた。  
今日はギルドの初仕事をするために、皆で同盟アライアンスで待ち合わせをして  
いた。

とりあえずサイキはカイツに聞いてみる。

「何で、昨日来なかったのかな〜?」

それをカイツは飄々とした態度で受け流す。

「だから、言っただろ。ギルドの仕事を選ぶからって。きちんとシ  
ルラには連絡しといたぞ」

「嘘つけ、一昨日どうしてもやりたいクエがあるって言ってただろ  
うが」

「う・・・まあ昨日は忙しかったんだよ」

「後で付け合せはしてもらうからな」

問い詰め終わった後、今度はニムに話しかける。

「ありがとな、いろいろ面倒なことは任せてしまって」

「いえいえ、大丈夫ですよ。それにサイキがやるとメチャクチャに  
なるでしょうし」

ぐ・・・正論を突かれた。ニムから書類を渡される。それをギルド

カウンターに渡して、席に着く。

皆が席に着いたところでカイツが一枚のクエストを出した。その紙を覗き込むとカイツが言った。

「おう、これよ。このクエストが今日やるうと思ってるクエストよ。ストーンイーターの狩獵」

それを聞いてニムが反論した。

「アレはまだ私たちで狩るのはつらいのでは？」

ストーンイーターはどの地域にも生息する中級モンスターだ。通称ストーンイーターと呼ばれている。動きは遅いがその体の硬さと攻撃力は強く、上級モンスターに引けをとらない強さを持っていた。確かにあのモンスターは簡単には倒せないだろう。

しかし、カイツは何とかなるって、の一点張りでクエストを受けてしまった。

「はあ、まあやってみますか。ええと、ストーンイーターは土属性のモンスターで弱点は水、攻撃方法は体を使った攻撃だけですね」

ニムが一通りのモンスターの情報を述べる。

サイキはふと疑問に思ったことを聞いてみた。

「何で、ストーンイーターを狩りたいんだ？ 鉱石か？」

ストーンイーターは体内に鉱石を精製する性質を持っている。その鉱石は純度が高く、武器の材料にもなりやすい。カイツはいんやと首を振り、

「ああ、違う。あいつの皮が欲しいんだ。新しい武器を作るのに必要だね」

サイキは納得した。

今度はニムがシルラに話しかけた。

「ああそうだ、頼まれてたもの作っておきましたよ」

と言って袋を渡す。それを受け取り、中を確認してシルラは満足そうに言った。

「ありがとね。これ買つと高いのよねー、アルケミストがいてよかったわー」

そう言い、中から1個を取り出して眺めていた。それに興味を持つたらしく、今まで黙っていたシャルが口を開いた。

「それなんですか？」

「これはクリスタルって言って、簡単に言つと属性の力を閉じ込めた結晶よ」

中から2、3個取り出しシャルに渡す。

クリスタルはシルラが言った通り、火や水などの属性が入った結晶だ。弓に取り付けると、属性をともなつた矢が放てる。

シャルはしばらく眺めていたが、

「これ一通り貰っていいですか？魔法にも使えるかもしれないんで」

「ん？いいわよ、はい」

と言って全属性の結晶をひとつずつ貰っていた。どうやって使うのが気になったがサイキはとりあえず場を仕切ることにした。

「皆、準備はしてきたよな。それじゃあ、行こうか」

と言って同盟を後にした。

アライアンス

国を出たところでシャルが呼び止めた。

「あ、待ってください。私少しはエンハンスかけられるんで」

と言って詠唱を始めた。いつもはしないことなので全く頭に無かった。

「シールドフォース、スペルエンハンス、ライトブレス！」

シャルがエンハンスをかける。ちなみにシールドフォースは物理守備力上昇、スペルエンハンスは詠唱時間短縮、ライトブレスは命中回避率に補正があるエンハンスだ。

そして、風のクリスタルを出して

「これはうまくいくか分かりませんが……ライジングウインド！」

クリスタルが光り、エンハンスがかかった。どうやら成功のようだ。シャルは自分使えない属性をクリスタルで補い、魔法を完成させたのだ。思いつきもしなかった発想だ。

ともかくこれで風属性のダメージが半減になる。

「凄いな、シャル。クリスタルをあんな風に使うなんて」

「いえ、ライジングサンは覚えていたんで応用できないかな、と」

そして、ギルドの初仕事が始まった。

「〜〜敵を切り裂く真空の刃となれ、ウインドカッター！」

サイキの魔法が完成し、最後のモンスターを切り裂く。それが戦闘の終わりを告げた。

シャルが加わり、戦闘は格段に楽になった。多少のダメージはすぐに回復してくれるし、エンハンスも絶妙な場所できちんとかけてくれる。そのため、戦闘時間も短く済んでいた。

そのまま進んでいくとカイツが声を上げた。

「おい、いたぞ！ストーンイーターだ！」

見ると、崖と大岩のわずかな幅に奇妙な生き物がいる。一言で言えば巨大なミミズ<sup>ワーム</sup>だった。

ストーンイーターは熱心に食事をしていた。体の先端についた丸く開くその口には、いくつもの尖った歯が生えている。その名の通り岩を食べていた。

サイキは皆に合図を送ると、魔法を放った。

「〜〜一陣の風となりて敵を貫け、ウインドアロー！」

風の矢がストーンイーターに向って飛んでいく。ウインドアローは

ウインドカッターに比べ威力は落ちこむが、狙いがつけやすい。サイキは体の中心を狙って撃った。  
ズドンと音がして命中する。

キイイイイ!

ストーンイーターが発した金切り声が鼓膜を打った。それが戦闘開始の合図となった。

カイツが隠密を使い、回りの景色に溶け込む。サイキは他の3人の前に立ちふさがるようにでた。

シルラが矢を放つ。しかし矢はきいんと音を立ててはじかれた。

「やっぱり堅いか・・・」

ストーンイーターは標的をシルラに決めたようで、勢いをつけ突進してきた。

それをサイキが細剣レイピラで弾く。押し返せこそしなかったが、軌道を変えることには成功した。

「・・・戦意を喪失させよ、弱体ネストよ！」

二ムの魔法が決まり、相手の攻撃力が落ちる。そこにシルラがもう一度矢を放った。

「これならどうよ!」

見ると矢が水の属性をまとっている。矢は今度は弾かれること無くストーンイーターに突き刺さった。

そこへ隠れていたカイツが現れ、矢が刺さった場所に小刀を突き刺した。すぐに引き抜き、敵の攻撃範囲から離脱する。

サイキも細剣単発SSソートスキル、シャープランスを使い切りかかるが弾かれる。

「SSでも通らないなんて、堅すぎるぜ……」

その時、シャルがあっ、と声を上げた。どうしたのかと見ると、

「水で通るんなら……」

と何かを思いついたようだ。彼女はポーチから水のクリスタルを取り出すと詠唱し始めた。

「……新たな力を授けたまえ、アクアアデクション！」

魔法が完成し、全員の武器に水属性が付加される。彼女は属性付加もクリスタルで応用したのだ。

その応用力の高さに感心しながら、サイキは次のSSを使うための力をためる。

そのまま射程距離に入り、細剣3連撃スキル、トライショットを放つ。

今度はきちんと通った手ごたえを感じた。続けて残りの2発を放つ。弱点の属性攻撃を連続で食らいストーンイーターが荒地に横たわる。全身が何度か引きつるように動いていたが、すぐにそれも止まった。ようやく絶命したようだ。

カイツが近寄り、皮をはいでいた。そして一通りとり終わるとそれをポーチに詰めていた。

本当に必要なものしか取らないやつだな、などと思いつながらサイキもストーンイーターの死体に近寄る。

皮をはがれて結構えぐい姿になっていたストーンイーターだったが、構わずサイキは切り裂いた。

中は噛み砕かれた岩がどろどろの土になっていた。その中からサイキはお目当てのものを見つけると、それをつかんで引き抜いた。

握り締めた手のひらを開くと、輝く石が握られていた。綺麗な赤い鉱石だ。火の光にすかすと、石の中で炎が揺らめくように輝く。

名前を亜鉛鉱石という。これはその中でも紅亜鉛鉱と呼ばれるものだ。かなり大きく、純度もよかった。

これは何かに使えそうだな・・

それをしまい、皆のほうを見てみると、なにやらカイツとニムが話していた。

「これ、帰ったら作つといてくれよ。よろしくな」

「なっ・また私にやらせる気ですか。工房でやってもらえばいいでしょうに」

「だって、工房でやると金がかかるしな。そこんとこお前ならタダ」

ドンマイ、ニム。と心の中で思いながらサイキは荷物を片付けた。こうして、ギルドの初仕事は終わったのであった。

外2 5人で（後書き）

次からは次の国に向け出発したいと思います。  
感想・アドバイス等何かありましたらよろしく願います。

## 出発（前書き）

2章スタートです。

章タイトルはあとで変わるかもしれない、はい。  
では、ごじゆ。



いた。  
サイキが声をかける。

「準備終わったかー？まあ、その様子じゃまだみただけど」

シルラが手を動かしつつ、早口で答えた。

「もーちよいかなー、後5分くらいまってー」

よく見るとシルラの荷物は量が多かった。サイキとシャルのを合わせても、まだ少ないくらいだろう。

「そんなに使うのか？あんまり重くしてもてなくなっても知らないぞ」

サイキがあきれながら言うと、シルラも言い返した。

「もしものときを考えると必要だよー、あといざとなったらサイキに持ってもらおうし」

「おまえな……」

シルラも終わらないようなので、シャルとたわいの無い話をして時間を潰す。

10分くらいたってやっとシルラの荷物がまとまった。予想どおり、凄い量の荷物だ。

「おまたせー。あと、サイキ半分持ってね」

当然のようにシルラは半分だけ荷物を持って、外へ出て行く。

はあくため息をついて、もう片方の荷物を持つ。  
シャルが、

「大丈夫？」

と聞いてきたが、心配ではなく楽しんでいるようだった。  
そのまま3人で集合場所に向くとニムがいた。  
ニムはこちらを見つけると、

「おはようございます、昨日はよく眠れましたか？」

などと、ベタな質問をしてくる。彼も緊張しているのだろう。  
カイツはまだ来てないな…まあ、いつものことだし話を進めるか。

「んじゃ、これからのことを確認するぞ。まず目的は土の国に向かうこと。次に経路についてだが、昨日ニムと話し合ったんだが・・・」  
それをニムが引き取る。

「安全性などを考えた結果、氷の国を経由していくのが一番いいという結果になりました」

サイキもつなずいて、言葉を続ける。

「それで、考えられるのはシャルの追跡だが、それについては各個撃破してく形にしようと思うんだが、これはみんなの意見を聞きたい。どう思うっ？」

まずシャルが言った。

「私はそれでいいよ。でも、結構テンプル騎士は強いからいざとなつたら、前みたいにシャインスニーク使ったほうがいいよー」

的確な解説を加えて、同意してくれる。  
次にシルラが言った。

「私も初めはそれでいいと思う。けど、何回も繰り返すと対策立てられるわよ。もしかしたら、シャインスニークももう対策されてるかも」

「それなら大丈夫だぜ」

「な、お前いつの間に」

「いや、今来たところだけど」

声のしたほうを見るとカイツがいた。ていうか、やっと来たのかお前。

「んで、対策つてなんなんだ？」

カイツは手でドンと胸を叩いて、

「おうよ、シャインスニーク以外にも逃げる方法があるってことだ」

「シャインスニーク以外で・・・？一応確認しておくが、走って逃げるとかじゃないよな」

「いや、何回も見せたことあるが隠密つてスキルあるだろ。そのスキルなんだが、自分とあと一人、まあ触れてなきゃダメなんだが、

一人までならそいつにもスキル効果がかかるんだ」

なるほど、それは確かに使えそうだ。  
カイツが続ける。

「それにシルラも隠密覚えてるだろう。だからシルラと一緒にシャルは消えればいい、そして隠密を相手が解くにはスキル解除魔法を当てなきゃいけない。隠密で姿は消えてるから、ほとんど当たらないだろうし、もし当たりそうになっても俺やサイキが止めればいい。どうだ？」

カイツが話し終わる。ふむ、カイツにしてはかなりいい発想じゃないか。

ニムのほうも見てみると、それでいいだろうというアイコンタクトが飛んできた。

「じゃ、追撃の対策はそれでいく。他に確認することは・・・何かあるか？」

と言って周りを見渡すとニムが言った。

「確認することではないのですが、シャルさんとシルラの分のクリスタル作っておいたんで渡しときますね」

ニムがクリスタルを2人に渡す。この一週間でシャルもクリスタルを使った応用術を編み出していた。

俺も頑張らないとな・・・このパーティで壁タンクになれるのは俺だけだし、対人戦も多くなるだろうし。  
とりあえず、こんなもんか。

「じゃあ、そろそろ行きますか。あんまり遅くなくてもつらいだろうしな」

と言って、自分一（シルラの分もあるが）の荷物を持って立ち上がる。

最後に、依頼主であるシャルが締めた。

「皆さん、よろしく願いします!!」

そして、サイキたちは風の国を出たのであった……  
次の目的地、氷の国に向って……

## 出発（後書き）

どうでしたでしょうか？

感想・アドバイス等何かありましたらよろしく願います。

## 不吉な予兆（前書き）

やっぱり、情景を言葉で表すのは難しいです。  
伝わらない箇所もあるかもしれませんが、初心者だと思って許して  
ください。  
では、どうぞ。

## 不吉な予兆

「シルラ急げ！ウインドカッター！」

サイキたちはテンプル騎士と対峙していた。

風の国を出てすぐに一回、その3日後に一回、そしてついさっき途中の村を出たところでテンプル騎士に襲われていた。

シルラの言うとおりにテンプル騎士はすぐに対策を立ててきた。シャインスニークはもう使えないし、隠密もそろそろ通用しなくなってきた。数も増えていて、今回は10人で襲ってきた。

サイキの放った風の刃は敵の盾によって消失した。サイキは盾の掲げて魔法を打ち消した敵に対して切りかかる。少しでも気をそらすためだ。

「ああもう、分かっているわよ。シャル、こっち！」

シルラがシャルに近寄ろうとするが、魔法で牽制される。テンプル騎士たちは隠密の使えるシルラとカイツをシャルにちかづかせないようにしている。そのため、隠密が使えない。

サイキは魔法を放ってくる敵に狙いを定め、一番近くにいた敵に細剣2連撃SS、ダブルクスソートスキルを放つ。十字架を描くように放たれた2つの剣線が敵を切り裂く。

その隙にシルラがシャルに接近する。2つの魔法が撃たれるが、それをかわしてシャルの近くにたどり着く。そして、隠密を使い、シャルと戦闘を離脱した。

よし、と気が緩んだ瞬間テンプル騎士の接近を許してしまう。無理やり体をそらす、振り払われた剣はサイキの肩口をえぐる。

そのまま、追撃してしてくるのをニムの矢が牽制する。ニムは魔法が通じないので、シルラの弓を借りて援護にまわっていた。

「おい、サイキ大丈夫か!!」

そして、カイツがサイキともに隠密を使う。残ったニムも練っておいた透明化で周りの景色と同化した。

とりあえず今回も逃げ切ったようだ。サイキはそのことにホツとしながら、前もって決めておいた場所へ移動する。そのときになって肩の痛みに気づいた。

結構深く斬られたようだな・・・

集合場所についた頃には、肩に力が入らなくなっていた。

隠密を解き、皆のところに行くところとシャルが血相を変えて近づいてきた。

「大丈夫、サイキ!？」

シャルは肩の傷に気づいて、すぐさま魔法を唱え始める。

必死な顔のシャルもかわいいな、って俺は何やってるんだ・・・シャルの魔法が完成し、光がサイキを包み込む。傷口はどんどんふさがっていき、血も止まった。

手を握ったり開いたりして、異常が無いか確かめる。うん、大丈夫なようだ。

「ありがとな、シャル。助かったよ」

「え、あ、うん。どういたしまして、サイキ、ほんとに大丈夫?」

とって、ぺたぺた肩を触ってくる。

そんな様子を見ていたシルラが声をかけた。

「あのー、お二人さん? いちゃいちゃしてんのはいいんだけど、そ

ろそろ行きたいんだけどー」

それを聞いて、サイキとシャルはぱつと離れた。顔も赤くなっている。

シルラはいつものごとくニヤニヤしていたが、それを無視して話を戻す。

「じゃあ、行こうか。氷の国はもう少しのはずだから」

と言って、歩き始めた。

氷の国に着いたのは、それから1時間くらい歩いた後だった。入国するには身分証明書が必要だったが、ギルドという肩書きがあったため、シャルもすんなり入れてもらえた。

しかし、国に入って目を疑った。

あまりにも人が少なすぎるのだ。商店や交易を行っている人々はいない。しかし、一般市民の姿が全くと言っていいほどないのだ。

大通りもがらんとしていて、賑やかさなど皆無だった。

サイキは不吉な予兆を感じていた。

不吉な予兆（後書き）

感想・アドバイス等何かありましたらよろしくお願ひします。

## 正体（前書き）

サブタイトルいいのが思いつかなかった・・・  
では、どうぞ。

## 正体

とりあえず、とシャルが言った。

「まず、領主館に行ってみましょう。そこに行けば、何かわかるはずですよ」

領主館はその国の領主、つまり代表がいる場所である。そこにはいろいろな情報が集まってくる。

しかし、領主がいるだけあって厳重に警備がしかれ、一般人は入れなかったはずだ。

「しかし、領主館には何か特別な理由でもない限り一般人は入れなかったはずですか？」

ニムが異論を挟んだ。

クラスチェンジ

サイキも一回だけ魔法剣士に転職するときに入ったことがあったが、それ以外では入ったことが無かった。

しかし、シャルは、え？と一回首を傾げてから、ああと納得がいったようにうなずいた。

「それなら大丈夫ですよ、とりあえず行きましょう」

何が大丈夫なのか分からなかったが、シャルの言うことに従うことにした。

すると、シルラが口を開いた。

「あのさー、領主館に行くって事は堅苦しい話を聞くってことよねー。私はめんどくさいから今日泊まる宿でも取ってるねー」

と言って、領主館行きを辞退した。すぐに、俺もーとカイツも辞退する。

お前らな・・・まあ、宿取りも必要だしいいか。

その時、あ！とシルラが声を上げた。何かかと思いい見ると、いつものにやけ顔になっていた。やばい何かやばいことが・・・シルラはまずニムに話しかける。

「ねえ、あんまり大勢で言っても迷惑だし、も一人ぐらいこっち来ない？」

何を考えてるんだ・・・？

「でもシャル一人で行くのもかわいそうだし〜」

いつものごとく、全く要点がわからない・・・

「ニムはこっちに来なよ〜」

ニムは一瞬、は？という顔になったがすぐに、ああと理解して、

「ああそうですね、私もそっち行きますよ。話しはシャルさんに聞けばいいんですし」

そしてすぐに、

「よし、決まり！」

とシルラに決定された。つまり、俺とシャルを2人きりにしたいわけか・・・

シャルはまだ意味が分かっていないようで、ん？と首をかしげている。

それで、とシルラが締める。

「時間もかかるだろうし、夕方頃ここで集合ね。まあ残った時間は好きにしていいよ、デートとかね〜」

シャルがポフツと赤くなった。やっと意味が分かったか。

それにしても、電光石火の速さで決められた・・・

んじゃね、と言ってシルラ達はどこかへ消えて行った。

これまた速いな・・・

「そ、それじゃ、行こっか」

シャルが少し嘸みながら言った。まださっきの動揺が引いてないな・・・  
まあ、こんなところに突っ立ってて仕方ないし、行くか。

「ああ、いこっか！」

声が裏返ってしまった・・・やばい俺も相当動揺しているようだ。

・  
・

なんだかんだで、サイキとシャルは領主館に着いていた。

予想通り、警護の兵が沢山いた。さてどうやってシャルは入るのかな？

「サイキ、ちょっとここで待ってて」

と言って、シャルは一番入り口に近い兵の所へ歩いていった。なに

かを少し話して、てってってと戻ってきた。

「オツケーだって。すぐ会ってくれるってよ。行こっ」

と言ってサイキの手を引く張って中へひっぱっていく。

サイキはシャルに対して、驚きを隠せないでいた。

どんな手を使ったんだよ??そして、すぐ領主に謁見できるって・

・

シャル、君は一体なんなんだ・・・・・・?

## 正体（後書き）

そろそろ新しいキャラ出そうと思います。

感想・アドバイス等何かありましたらよろしくお願いします。

## 襲撃（前書き）

人の名前を考えるのが難しいです。

好きな小説とかの名前を組み合わせたりしながら作ってるので、似てる名前の人も多いと思います。  
ではごっご。

## 襲撃

シャルの言うとおりに、何の問題もなく領主館に入った。当然、武器は回収されてしまったが。

シャルは周りの目を気にすることなくづかづかと歩いていく。途中不審な目を向ける者もいたが、特に興味を示すわけでもなく、すぐに自分たちの仕事に戻っていた。

サイキはシャルの後ろつについていきながら、物思いに耽っていた。ただ領主が気が優しいだけか？それともシャルの隠し事が計り知れないほど大きいのか・・・

そのため、シャルが止まったのに気づかず、ぶつかってしまった。

「きゃっ」

「うわっ」

こつちを振り向いたシャルが非難の声を上げてくる。

「うっ、痛いよー、サイキー」

「ごめんっ。ちょっと考え事してて・・・」

「もう・・・とにかく、着いたよ」

シャルが指差した方を見ると、豪勢な扉があった。たぶんこの先が領主の部屋なのだろう。

シャルは、こんこんと扉をノックして扉を開けた。いや、開けようとした。しかし、扉が結構重いようで、開けようとしても開いていなかった。

サイキが変わり、扉を開ける。

ついてきてよかったなー、なんて場違いなことを思っていると、シャルはすたすたと中に入って行ってしまった。慌ててシャルを追いかけると、中で領主らしき人物を見つける。結構若いな、それがサイキの初見の感想だった。

領主を見つけ、シャルは優雅にお辞儀をした。サイキもシャルにつられてお辞儀をした。

しかし、帰ってきたのは意外な言葉だった。

「ああ、頭を上げてください。別にかしこまらなくて結構ですよ」

サイキは驚いた。領主に会ったのは初めてだったが、想像していたのはもつと威厳のある雰囲気だと思っていた。しかし、実際はかなり違っていた。

サイキとシャルが顔を上げると、氷の国の領主は続けた。

「領主と言っても1人の人間ですしね。平民と上流貴族の差があることのほうが僕は気に入らないんですよ」

改めてみると、やっぱり若い青年だった。見た感じも接しやすいい人で、サイキはホツとしたような不思議なような気持ちになった。しかし、この年で領主にまで登りつめたのだから結構な才能の持ち主なのだろう。

「あ、そうでした。申し遅れましたね。私が氷の国領主デスク・ブルラストです」

「サイキ・レーゲンです」

「シャントリーネ・カルラ・ヒュラセルンです」

このとき、サイキは初めてシャルの本名を聞いた。そして、シャルがかなりの上級貴族だということを知った。名前の中にミドルネームは、生まれた時に上位の貴族だけに与えられるものだ。逆にデスクはミドルネームが無いため、平民の位から登りつめたという事になる。

それと同時に何故？という疑問も湧いてきた。上流貴族なら別に仕事をしなくても生きていけるくらいの財産はあるはずだ。それなのに脱走とは・・・

デスクもシャルの名前に驚いたようだったが、話を続ける。

「それで、今日はどんな用件があったのでしょうか？」

「あ、えつと、それは・・・」

とサイキが言いかけたところで、私が話すというアイコンタクトがシャルから飛んできた。まあ、シャルのほうの話すのも得意だろうと思ひ、話を譲る。

「はい、今日は土の国に行くためにこの国を経由させてもらおうと思っただのですが、国に入ったときに国の様子がおかしいことに気づきまして、今の現状を教えてもらえればと」

シャルがすらすらと述べた。絶対自分が言ったら噛みそうだなーなどと思っていると、デスクが答えた。

「やはり、おかしいと思いませんか。まずそれを説明するにはこの国から北に向った・・・」

と説明し始めたそのときだった。一人の兵が、血相を変えて部屋の

中へ飛び込んできた。

「敵です！敵襲です！！魔物の郡がこちらに向っています！！」

飛び込んできた兵が悲鳴じみた声を上げた。

「なっ、またか！全軍で迎撃しろ！一人も国民を死なせるな！！」

デスクが叫んだ。

まった、何がおきているんだ？敵襲？つまり今この国の中に魔物がいるって事で・・・

そこまで意識が追いついたとき、サイキはシャルを引っ張って部屋の外に出た。

「俺らも迎撃に加わります！」

そう言いながら、走り出す。デスクが

「頼みました！終わったらまたここに来てください！」

と言って、回収されていた武器を投げってくる。それを片手で受け取りながら、シャルを抱えてもと来た道を疾走する。

すぐに入り口までたどりつき、領主館から飛び出た。

そして、領主館を出て目にしたものは・・・

空にひしめく魔物の大群だった。

## 襲撃（後書き）

デスクの性格がニムとかぶりかけている・・・  
感想・アドバイス等何かありましたらよろしく願います。

## 迎撃開始（前書き）

16話です。

では、さよう。

## 迎撃開始

「なっ、なんなんだよ・・・この数は」

サイキは呻いた。空にひしめく魔物の大群。少なく見積もっても50以上はいる。

ところどころでは戦闘が始まっており、怒声や魔物の唸り声などが聞こえた。

「とりあえず、皆と合流しよう」

サイキは言った。2人と3人で戦うより、5人でいつせいに戦った方が格段に速い。

そう思つての提案だった。と、そこでシャルが声を上げた。

「えっと、あのー、サイキ？そろそろ降ろしてもらえると助かるんだけどなー・・・」

シャルが腕で抱えられながら言った。そういえば、デスクの部屋からずつとこのまま抱えてきてしまった。

「じゅんっ」

といて、シャルを降ろす。シャルは一瞬残念そうな顔をしたが、いや気のせいだろう。

サイキは細剣レイビデを抜き放ち、行こうとすると、またシャルに止められた。

「あ、ちょっと待って。一応エンハンスかけるから」

シャルが詠唱をし始める。サイキもエンハンスをかけてる間に何個か魔法を練っておくことにした。  
2つ練り終わったところで、シャルのエンハンスが完成する。

「シールドフォース、ウイングブーツ、ライトプレス！」

シャルは守備にかかわるエンハンスだけ唱えてきた。ちなみにウイングブーツは一定時間、移動速度を上げる魔法だ。攻撃系のエンハンスは合流した後にかけるのだろう。  
エンハンスがかかり終わったのを確認して、街の大通りに向って走る。

少し進んだ後、シャルが叫んだ。

「サイキ、上！」

上を見ると今まさにモンスターがサイキにむかって突進して来るところだった。かろうじて レイピア 細剣で受け流す。そのまま、後ろに下がりシャルの前で壁となる。

見たことも無いモンスターだった。小型のドラゴンだろうか？

ドラゴンは爪を振りかぶって切り裂いてきた。魔法で止められるか？ 練っていた魔法を撃とうとすると、

「敵を阻む障壁を築け、バリア！」

シャルが魔法を唱えた。ドラゴンはサイキの前に形成された不可視の障壁に衝突し、跳ね返された。

巫女はこんな魔法も覚えるのかなどと考えながら、シャルに言った。

「サンキュー、助かった」

「お礼を言うのは後、私攻撃できないんだから、早くあれ倒して！」  
「へいへい」

無駄口を叩きながらも、練っていた魔法を発動する。

「まずはこいつだ。アースボム！」

ドラゴンの真上に風の球体が現れる。これは、要するに地雷で触れたり、ぶつかつたりすると爆発する。本来なら敵の足元とかに置く魔法なのだが、

「んで、ウイングアロー！」

ウイングアローをアースボムに向かって撃ち込む。ウインドアローは狙い通りアースボムにぶつかる。

その結果、アースボムが爆発し、ドラゴンに向かって風の刃が雨のように降り注ぐ。

グギイイイイイイイイ！

ドラゴンが絶叫を上げる。自分でやっといてなんだが結構グロイ光景になってしまった……

まもなくドラゴンは絶命した。とはいっても、まだこれで一体なのだから骨が折れる。

気づくと、シャルがぐいぐいっと服の袖をひっぱっていた。

「サイキつてさ、実は結構性格悪くない……？」

シャルは顔を青くしていた。さっきの事だろう。さすがに少女にはこたえる光景だった。

何故あんな作戦が思いついたのだろう。  
いろいろ理由を考えたが、なぜか否定できる理由は見つからなかつた。  
・  
・  
・  
・

## 迎撃開始（後書き）

感想・アドバイス等何かありましたらよろしくお願ひします。

## 詮索（前書き）

途中で切ってしまったんで、少し短くなりました。  
では、どうぞ。

## 詮索

そのまま、シャルを守りつつ進んでいくと、3分ぐらいで待ち合わせ場所に着いた。

しかし、三人の姿は見えない。

「どこで戦ってるんだよつと」

などと言いつつ、一番近くにいたドラゴンを切りつける。今は殲滅が目的ではないので、深入りはせず、向ってくる敵をいなすことに重点をおいていた。

周りでも戦闘は起こっているようだが、残念ながら探している余裕は無い。

だったら・・・

「シャル！敵は俺がひきつけるから、その間にニムたちを探してくれ！」

シャルはこれを聞いて、実行に移すべきかどうかを迷った。サイキはもともと攻撃仕様の装備をしている。そのため、守備力は他の前衛職に比べ、低い。偶発的被弾でもダメージは少ないのだ。現に、さつきからずっとシャルは回復魔法を唱えていた。

ニムたちを探している間はこの回復が切れる。そうになると、サイキが危ないのだ。

「俺は大丈夫だからやってくれ。いざとなったらシャルごと抱えて逃げるからさ」

後押しするように言った。シャルは一度、彩輝の方を見てから、

「ん、わかった。絶対に死なないでね」

「ああ、約束する」

シャルが目を閉じ、詠唱を開始する。シャルの足元から魔力の波が広がるように流れていく。

これはたしか、サーチアイという魔法だったはずだ。魔力の波を送って、そこから得た情報が頭の中に入る。しかし、その間は目を閉じて無くてはならず、基本的に戦闘を後方から支援する魔法だ。

魔力の波に釣られて、ドラゴンが寄ってくる。この数では、さすがに全てのドラゴンとともに戦っている時間は無いだろう。ドラゴンたちが近づいてくる前に、サイキは魔法を詠唱する。

「〜〜敵を切り裂く真空の刃となれ、ウィンドカッター！」

相手の翼を狙って魔法を放つ。見事に命中し、地面に落ちる。ここまでは作戦通りだ。

ドラゴンたちが射程内に入る。ここからはシャルを守りながら動かないといけないため、魔法は放てない。ソードスキルSSだけで戦うとなると、なるべく地上で迎撃した方がやりやすい。

一番近くにいたドラゴンに向かって、細剣3連撃スキル、トライショットを放つ。

ガスツと音かしてどうにか射程外に押し戻す。

やっぱりこの程度じゃ、きいてないか・・・だったら！  
レイピア細剣を居合い切りをするかのように腰の横に構える。そして、

「ふっ！」

掛け声とともに左手で右の手首を叩く。その勢いを生かして柄で敵

を叩く。

直剣SSスマツシュブロウ。SSでは珍しい柄で攻撃する技だ。それと同時に細剣レイピアで打撃属性の技が放てる数少ないSSである。威力的には余り高くない。しかし、狙いは眉間に定めていた。眉間に打撃技を食らったドラゴンは脳震盪を起こし、仰向けに倒れる。振り返ると、一匹がシャルに接近していた。すぐさま戻り、シャルに爪が届くギリギリのところレイピアで、細剣をねじ込ませ、爪の軌道を変える。そしてもう一度トライショットでシャルから離れさせる。そこまですたところで、シャルが目を開けた。

「サイキ、いたよ！」

シャルがニム達を見つけたらしい。それを聞いてサイキはシャインスニークを放ち、シャルとともに戦闘を離脱した。

## 詮索（後書き）

感想・アドバイス等何かありましたらよろしくお願ひします。

## 合流（前書き）

緊迫した状況って、結構書きにくいです。

ですので、最後のほうの場面、余り緊迫感が無いかもしれません。

そこは許してください、よろしく願います。

では、どうぞ。

## 合流

「みんなの様子は？」

「今は大丈夫。あ、一匹片付けたよ」

走りながらサーチアイをかけていられるシャルに驚きながらも、  
— 応は安心できた。

「シャル、今のうちに魔法を練つといてくれ。皆と合流したらもう  
い」

「あ、もう終わってるよ」

「はやっ」

「サイキも練つといたら？」

なんとと言う頭の回転だ・・・  
絶句しつつも、サイキも魔法を練り始める。もちろん周りの敵には  
気をつけながら。

「あ、次の交差点、右ね」

シャルに従い右に曲がる。そして魔法が練り終わる。  
もうちよい、急ぐか・・・

「シャル、ちよいと失礼」

と言って、シャルを抱える。いつも思うが軽いな！。

「え、あ、うっ？」

シャルは抱えられたことに気づき、顔を赤くする。

「うっっっっ、抱えるなら先に言ってよー。ま、いいんだけど・・・

」

最後の方はよく聞こえなかった。なんて言ったんだ？なんかものすごく残念な気がする・・・

「あ、そうだ、ウイングブーツ！」

シャルが切れていた移動速度上昇魔法をかけてくれる。

その後も、シャルの指示に従いながら走る。

「そこの先だよ！」

見ると、ニムたちがドラゴンと戦っているのが見えた。

こっちにいち早く近づいてくるのに気づいたニムが声をかけてくる。

「サイキにシャルさん、こっちです！」

その言葉で他の2人も気づいたようでこっちに声をかけてくる。

「おっ、王子様にお姫様の登場ってところだねっ」

「そんなこと言ってないでこっちに集中しろ！」

カイツがシルラに叫ぶ。サイキはニムの近くに停止すると、シャルを降ろし、細剣レイピアを抜き放ち、前衛に加わる。そのまま練っておいた魔法をぶつける。

「行くぜ、ウインドカッター！」

迫ってくる3匹に対して、牽制をかける。その隙に、シャルが再度エンハンスをかける。

「シールドフォース、スペルエンハンス、ライトブレス、最後にライジングシャイン！」

4つの光がサイキたちを包む。各種エンハンスの効果で能力が上がる。

サイキたちが加わったことで、状況は一気に好転した。皆が、自分たちの役割に徹せるようになり、襲い来る魔物を次々と迎撃していた。

周りを見渡せる余裕も出てきた。何体の魔物かはもう逃げ出しているようだった。

よし、何とか防衛はできたな……

そう思ったその時だった。

不意について、後ろから一匹のドラゴンが突っ込んできた。狙いはシャル。

防衛が終わりかけてきた事に少し気を抜いてしまった。そのせいでとっさには動けない。ニムもカイツもそこからは距離があり、届かない。シルラも、これから矢を番えていたのでは間に合わない。

シャルは、魔法を唱え終わったすぐあとで、動けない。練っていた魔法も全て撃ちつくしてしまった。

くそっ、どうにも間に合わない……

得物を投げるかとまで考えたが、シャルに当たる可能性も考慮する

と無理だという結論が出る。

こうしている間にもドラゴンはシャルに向かっていく。  
止まらない、何をしても止まらない。

何か言い表せない感情が、サイキの中をめぐっていく。  
サイキは叫んだ。

「シャル!!!!!!!!!!」

ドラゴンは少しも減速せず、そしてシャルに向かって突っ込む。

ぶつかる寸前、シャルが身を竦ませたのが分かった。

どうしても届かない。

しかし、結果は違うものとなった。

ドラゴンはぶつかった。しかし、ドラゴンとぶつかったのは、シャルではなく……………

赤い鎧だった。

## 合流（後書き）

どうだったでしょうか？

感想・アドバイス等何かありましたらよろしく願います。

## 赤い鎧（前書き）

前回から結構、日が開いてしまいました。すみません。  
新キャラも出して見ました。  
では、どうぞ。

## 赤い鎧

ドラゴンとぶつかったのは、シャルではなく、赤い鎧だった。鎧がドラゴンを受け止めている。

その間に、シャルのところまでたどり着く。

「シャル！」

そのまま、サイキはシャルを後ろにかばう。シャルを守ってはくれたものの、まだこの鎧が味方だとは限らない。

そうしている間に、鎧がドラゴンを押し返す。そして、腕についた大型銃の砲口から炎を放出する。炎はドラゴンを飲み込み、燃やし尽くした。

それが動かなくなったのを確認して、こちらを向いた。

鎧を纏った魔物というのが正しいだろうか、右腕には大きな銃もついでおり、見た目だけでも強そうだ。

やばい、こいつは……

「ありがとうございます、フレイムナイト」

凜とした声が響き渡った。声のしたほうを向くと小柄な少女が立っていた。

その声に反応して、鎧が少女の方へ動く。

「お疲れ様でした、またよろしくお願いします」

そういうと、鎧の足元に魔法陣が現れ、鎧は消えていった。

改めて少女のほうを向いた。やはり小さい、シャルもけっこう小柄だが、それよりも一回り小さい。

「では」

そう言っつて少女はてくてくと、もと来た道を帰ろうとする。サイキはあわてて声をかける。

「あ、ちょっと・・守ってくれてありがとな」

すると少女は振り返りもせず、

「いえ、当然のことですので。それでは」

そのまま歩いて行ってしまった。

「なんか、色々とすごい少女だったな・・・」

サイキは率直の感想を述べた。それにニムも同意する。

「ええ、つかみどころがない少女でしたけど。でも、あの魔物は何なんでしょうか？」

確かにそうだ。魔物が人間に従うなんて話聞いたことがないし、あれだけ気性が粗そうなのにきちんと命令にしたがっていた。小型の魔物、それも気性がおとなしい魔物ならまだ従えることもできなくはないだろう。しかし、あの鎧はかなり攻撃的で戦闘能力も高かった。

「あー、この後どうするの？」

シャルが遠慮がちに聞いてきた。辺りを見回すともう戦闘が終わっ

ていた。  
どうやらアレが最後だったらしい。

「んー、とりあえずデスクのところに戻るのがいいんじゃないか？」  
終わったらまた来てくれと言われてた気がする。あの時は、迎撃すること  
で精一杯だったからよく覚えてないが。

「あ、そつだ。お前ら宿取れたのか？」

それにはカイツが答える。

「おう、取れたぜ。そっちは問題なしだ」

なら、ニムも連れて行ったほうがいいのか。聞いて来たのをまた話すのも面倒だしな。いつそのこと全員で行くか？……

「よし、もう一回領主館に行くか。ニムは来るだろうけど、お前らはどうする？」

シルラとカイツにたずねた。すると、予想通り

「あたし（俺）はパス」

「わかった。俺たちが戻るまで好きにしてくれ。帰りはニムがいるから先戻ってでもいい、ニムもそれでいいか？」

「ええ、問題ないですよ」

「詳しい話は宿についてからってことで。じゃあ、解散」

こうして、3人でまた領主館に行くことになった。

シルラはもうどこかへ消えてしまった。よくはじめて来た所なのに道分かるな……

すると、カイツが近づいてきた。ん？付いてくるのか？

「サイキ、と一応シャルもか。あのよ、さっき宿取つてた時のことなんだが、なんかシルラが色々やってたみたいだったぜ。ま、気を付けてな」

そういうと、カイツもどこかへ行ってしまった。サイキの脳裏にあるニヤニヤした笑いが浮かぶ。

かなり危険な予感がするんだが。

そう思案していると、シャルが服の袖を引っ張ってきた。

「なんか私、とてもいやな予感がするんだけど……」

シャルも同じことを考えていたらしい。とは言ってももつづつにもできない。

「まあ、予感が予感で終わることを期待するしかないな……」

歯切れ悪くそう返すと、

「あ、あははは……」

と、シャルも苦笑した。

そして、その予感は正しかったと痛感するのは、宿についてからのことだった……

## 赤い鎧（後書き）

どうだったでしょうか？

悪い予感はその次で明らかになる予定ですw w

感想・アドバイス等何かありましたらよろしくお願いします。

## 非公式な依頼（前書き）

外伝合わせて20話目です！

この後一個外伝入れようかなーと思っています。  
では、どうぞ。

## 非公式な依頼

サイキたちは領主館の前まで来ていた。  
ニムがサイキに話しかける。

「それにしても、どうやって領主と面会したのですか？」

目の前の警護の兵の多さを見て言ったのだろう。それにしても、ついさつきまで戦闘があったというのに、何事も無かったかのように戻っているのは、さすがだと思った。

「ああ、それはシャルが・・・」

そこまで言ったところで、門の前の兵と話していたシャルが戻ってきた。

「入っていいってよー」

「とまあ、こんな感じに」

ニムもかなり驚いたようだったが、とりあえず中に入る。シャルが少し前を歩いているのを確認して、シャルに聞こえないようにニムが聞いてきた。

「さつきも、こんな簡単に？」

「ああ、すんなり入れた。後、シャル自身についてなんだが、ニムドルネームがあつた」

「ミドルネームですか・・・どこかいいところのご令嬢だとは思って  
ましたけどね・・・」

ニムも同じ考えにいたったようだ。話すのをやめ、何かを思案して  
いる。

「サイキー、早く、早く！」

扉の前にたどり着いたシャルが手招きしている。そういえば、シャ  
ルの力じゃ開かないんだっけ・・・  
扉の前に着くと、扉を開けてやる。

中に入ると、デスクと兵士がなにやら話しているようだった。

「だから、それはここを削って」

「いや、しかし、それでは・・・」

「それはこっちのほうで何とかする」

なにやら、討論をしているようだった。

「あー・・・」

シャルが声を出すと、デスクはこちらに気づいた様だった。

「ああ、せっかく来てくれたのにすまなかったね。あと、これを渡  
しといてくれ」

そういって、兵士との会話を区切ったデスクがこちらを向いた。

「まず、迎撃に加わってくれてありがとう。サイキ君にシャルロツトさん、それに・・・」

「お初の目にかかります、領主様。ニムラール・レヴァネールと申します。ニムと呼んでくださって結構です」

ニムがそういつて、礼をする。

「氷の国領主デスク・ブルーラストです。よろしく」

そこで一回切ってから、またデスクが話した。

「それで、先ほど話しかけたことですが・・・」

と言つて、つんであつた資料の中から一枚の紙を持ってくる。それを、机の上に広げてサイキ達に見えるようにする。

「これは氷の国周辺の地図なんですが・・・」

デスクが一点を指差す。

「ここから北に向つた所に、昔ある貴族が住んでいた城があるので、私たちはそれを氷の城と読んでいます。その城は20年ほど前に住むものがいなくなつて、廃墟と化していたんですが、最近、大きな魔物がその城を根城にしてしまいましたね」

「その城の大きさとここからの正確な距離は分かりますか？」

ニムがたずねる。城の大きさなんて聞いて何にするんだ？

「詳しく図ったことは無いのですが、ここから1日くらいで着く距離ですね。あと、大きさはことと同じくらいです」

「となると、その魔物もかなり大きいのですか？」

「ええ、調査隊を何度か送ったのですが、どうやらドラゴンだそうです。それも、今回町に来たのとは比べ物にならないほどの大きさですが」

今度はシャルが質問した。

「そのドラゴンが原因と分かっているのなら、どうして討伐隊とかを送らないんですか？」

「シャルロットさんの言うことは、尤もなんですけどね。しかし、討伐隊にほとんどの兵を割けないのが現状なんですよ」

つまり、その居ついたドラゴンが原因で街が襲撃されている。しかし、人手が足りず守ることしかできないという訳か。

そこまで考えていたところで、デスクから話しかけられた。

「そこで、あなた方にお願ひがあるのです。サイキさん達は、ギルドに入っていますよね。依頼として、そのドラゴンを撃退してもらえないでしょうか？もちろんお礼はいたしますよ」

領主からの依頼だって！？それもドラゴンを撃退するなんて・・・これほど珍しいことは滅多に無いだろうが、残念ながら受けられない。

サイキが口を開く前に、ニムが言った。

「すみませんが、この依頼は受けられません。先に別の依頼を受けているものでして」

ギルドでは、受けられる依頼は一つだけと決められている。一つ終わらないと、次の依頼は受けられないのだ。そして、今疾風の翼ラファールユネルはシャルの護衛という依頼を受けている。

「では、非公式な依頼としてはどうでしょうか？そちらの方がこちらとしても助かりますし」

非公式の依頼は、アラライアンス同盟を通さずに、直接依頼者からギルドに依頼する方法だ。そのため、いくら受けてもよく、ギルドに報告する必要も無い。そして、依頼者やギルドの名前も公表しなくていい。

それならば、問題は無い。どうにかしたいのは山々だが……シャルとニムの方を見る。俺の一存で、決めていいことではない。すると、シャルがサイキに言ってきた。

「私としては、これ受けたいんだけどだめかな？こっちは後回しでもいいから」

「いいのか？」

「うん、困ってる人をほっとけないっていうか……」

そこにニムが口を開いた。

「私もシャルさんと同じ意見ですね。事情だけ知って、このまま見捨てていくのもさすがに無情すぎると思いますし。まあ、ギルドリーダーはサイキなんですし、リーダーの意見には従いますがね」

ニムも同意してきた。

「どうやら、問題はないようだ。デスクのほうに向き直って言った。」

「分かりました。この依頼受けさせていただきます」

「助かります。報酬は用意しますので、どうぞよろしくお願いします」

デスクがホツとしたように言った。

そして、ニムが話を続ける。

「出発の方は、明後日でもよろしいでしょうか？」

「ええ、それくらいだったら問題ありません」

その後も何個かニムが質問して、内容を決めた後領主館をあとにした。

こうして、領主からの非公式な依頼を受けたのであった。

## 非公式な依頼（後書き）

感想・アドバイス等何かありましたらよろしくお願ひします。

## 宿での事(前書き)

恋愛面は書くのが難しいです・・・  
いやな予感も書いて見ましたww  
では、どしどし。

## 宿での事

程なくして、宿に着いた。

「一応、何が来てもいいように心の準備だけはしとかないとな」

「そうだね・・・」

シャルが同意する。

宿の扉に手をかける。そして、意を決して扉を開けた。

「ようこそ～～～～～～！！」

空けた瞬間、シルラが元気よく声をかけてきた。

「お前な・・・違う客だったらどうするんだよ」

「ん～～、そのときはそのときっ」

「疑問に疑問を返すな。それで、何をしてくれたんだ？」

一連の応酬のあと、シルラに尋ねた。

「良くぞ聞いてくれました！！今回は、部屋割りを私がしたんだよ  
～～」

「部屋割り？それで？」

シルラの説明は、よつくと要領を得ない。

「まず、この宿って2人部屋と1人部屋があるのよ。そして、特に理由もないし、2人部屋2つと1人部屋1つをとったの」

ここまででは正論だ。しかし、いやな予感は消えるどころかどんどん増え続けている。

何を企んでいる……

「んで、その部屋割りなんだけど、私はとっても優しいから、私が一人部屋を使うことに決めました〜」

「は？」

シルラの言ったことに対して、思考が追いつかない。えつと……

「だから、私が一人部屋を使って、ニムとカイツが同じで、残った2人部屋は残った2人にプレゼント!!」

ちよつと待てよ……シルラとニム、カイツ以外の残った2人つて……

俺とシャルか!!

思考が追いついて来たところで、当然のごとく反論する。

「おい、なんで俺とシャルが同じ部屋なんだよ。お前とシャルが同じ部屋使えばいい事じゃな……」

そこまで言いかけて、やっと気づく。目の前の奴の企みに……シルラの方を向くと、ニヤニヤとした笑いを顔に浮かべながら言うてきた。

「そーいう事。ま、私に宿取りまかせたのが失敗だったわね〜。もう、決定事項だからね〜」

迂闊だった・・・心の準備をしても、やはりどうこうなるものではなかった・・・  
いや、まだ道はある！

くるっと振り向き、今まで話を傍観していたニムに話しかける。

「ニム、取った部屋の場所分かるか？」

「ええ、2階の一番奥の3部屋です。ちなみに一番手前が1人部屋ですが・・・」

ならば、一人部屋を先に占領してしまうしかない。かすかな希望にかけて2階に上がるうとした時、

「あ、一人部屋は、もう私の荷物運んで鍵掛けといたから」

シルラのとどめの一撃を食らい、ばたつと倒れる。最後の道が消えて行った・・・

「私がそんなへまする訳無いでしょ」

その通りだった。何とか持ち直し、もう一度確かめる。

「部屋割りは、シルラが一人部屋。ニムとカイツ、俺とシャルに分かれるのな」

「お、認めただ〜。せつかく、あんな事やこんな事ができるよ  
うにしてあげただから」

「誰がするか！」

とてつもない脱力感を感じながらも、近くにあった時計を確認すると、もう7時を越えていた。

あれ、そういえばシャルが全く反応が無かったんだが……

そう思いつつ、シャルの方向を見てみると、

顔を真っ赤にして、ショートしていた。

まだ持ち直せてないのか……

とりあえずシャルに声をかける。

「おい、大丈夫かー。荷物置いて来るぞー」

などと言っても全く反応が無いので、シャルが背負っている荷物を預かる。

「俺、荷物置いてくるから先に夕食食べてていいぞ。あ、動かなくなったシャルも連れて行ってくれ」

「りょーかい、これ鍵ね」

と言つて鍵を放り投げってくる。片手でそれを受け取り、部屋へ向う。部屋は、簡単に見つかり荷物を置いて、すぐに戻る。

皆のところに戻ると、ニムが、さっきの依頼の件について説明しながら夕食をとっているところだった。

席に着くと、カイツが話しかけてきた。

「ま、ご愁傷様、とでも言っておくぜ」

「ヒトゴトだと思ってるだろ……」

「ああ。俺、関係ないしな」

からからと笑いながら言ってきた。話しつつも、夕食をとり始める。ニムの声に耳を傾けながら、しばらく無言で食べ続ける。ふと、シャルのほうを向くと、偶然シャルと目が合ってしまった。シャルは少し顔を赤くして、早口で言った。

「私、先に部屋に戻ってるね」

そう言って立ち上がる。持っていた鍵をシャルに放り投げると、危なげに受け取り、部屋の方へ小走りで走っていった。その様子を見ていたシルラが話してくる。

「せっかく私が、2人を一緒に部屋にしてあげたのに〜」

「余計なお世話だ」

「え〜、サイキだって、ほんとはうれしいですよ」

「はあ、もういいよ。俺も部屋に戻ってるわ」

「そして、2人でラブラブするといいよ〜」

もう反論するのも疲れた……  
席を立つと、一通り話し終えたニムが聞いてきた。

「あ、サイキ、明日はいろいろ、消耗品を買い込むことじょうと  
思うんですが」

「いいんじゃないか。すぐに出発しなくてもいいって言ってたし」

「じゃあ、シャルさんにも伝えといてください」

「ん、わかったわ」

そう言って、部屋へと向った。

## 宿での事（後書き）

どうだったでしょうか？

外伝は次の次に入る予定です。

感想・アドバイス等何かありましたらよろしくお願いします。

## 偽名と告白（前書き）

22話です。

今回はちよっと恋愛シーンを書いてみました。  
うまく書けたかどうかはわかりませんが。  
では、どうぞ。

## 偽名と告白

部屋の前に着くと、サイキは立ち止まった。

一応、異性と同じ部屋なわけだし……

とりあえず、ノックしてみる。しかし、反応がない。ノブを回してみると、鍵はかかっていなかった。

このまま、部屋の前に突っ立っていても不審に思われるので、中に入る。

部屋の中は大きな広間のようになっており、そこにベットなどがある。そして、入ってすぐの左手に洗面所と浴槽がある。

部屋を見渡すが、シャルの姿はない。洗面所に行っているのだろう。特にすることもないので、ベットに腰掛ける。そのまま明日のことをぼんやりと考える。

すると、不意に洗面所の扉が開いた。

そっちを振り向くと、シャルがいた。バスタオルだけを纏った。

「え、あ……きゃあ!？」

そう言つて、また洗面所の中に逃げ込んでしまう。どうにも反応できず、シャルがもどってくるのを待つ。

少したつて、洗面所から夜着に着替えたシャルが控えめに出てきた。そのまま、ベットに座る。

「えーと、とりあえずごめん」

こちらから切り出す。すると、シャルも返してきた。

「あ、いや……私も鍵掛けてなかったし……」

そして2人とも沈黙する。さっきのシャルもかわいかったが、口には出さない。

幾分か経ってから、口を開く。

「あ、そうだ。明日は休みにするから・・・」

「う、うん。わかった・・・」

さっきのことがちぐはぐとした会話になってしまっ。

シルラめ、面倒なことを・・・

この雰囲気を変えるため、何か話題を考える。そして、1つ思いついた。

「シャル、少し真面目な話しいいか？」

「え？あ、大丈夫だよ」

「シャルの名前のことなんだけど・・・」

「名前？あ、そっか・・・」

「ああ、ミドルネームのことなんだけど」

シャルにはミドルネームがある。つまり、シャルが上流貴族であるということだ。

「そっだよな。いつかはばれるとは思ってたけど・・・」

「いや、別に正体を聞きたいとかそっついうのじゃなくて」

「え？」

「それはシャルが話せるときでいいから。それよりも、偽名を作った方がいいと思うんだけど」

まだ、護衛ならばわかるが、上流貴族がギルドに入っているのはおかしい。毎回本名を言い続ければ、シャルの正体に気づいてしまう人が出てても可笑しくない。だったら、偽名を作ってしまった方が安全ではないか。

その考えにシャルも気づいたようだ。

「そっか、さすがに隠しきれるもんじゃないよね、ミドルネームって」

「ああ、幸いデスクは気づいていなかったようだし」

「うーん、偽名ねえ。なにがいいんだろ？」

シャルはもう自分の偽名を考えているようだ。

「普通に名前はシャルでいいんじゃないか？別に俺がつけたものだし」

「そうだね。それじゃ、家名はギルドを文字ってユリネスでどうかな？」

「シャル・ユリネスか。いいんじゃないか」

「じゃあ、これから私はシャル・ユネリスね」

その後も、シャルといろいろ話した。そうこうしている内に時間は過ぎていた。いつもなら、もう眠りに落ちている時間だ。シャルはもう欠伸をしている。

「そろそろ、寝るか」

「うん、そうだね。おやすみ」

にこつと笑顔を返しながら言ってきた。シャルの笑顔がかわいくて、つい恥ずかしくなる。

「あ、ああ。おやすみ」

それを聞くと、シャルは布団に顔をうずめた。

それから少したつて、隣から規則正しい寝息が聞こえてきた。もう眠ったようだった。

しかし、サイキは中々寝付けなかった。さっきのシャルの笑顔が浮かんでくる。

さっきのシャルの笑顔は、謙遜でも、お世辞でもなくかわいかった。その笑顔を思い出すたびに、恥ずかしさ以外のなにかで胸の鼓動が高まるのをサイキは感じていた。

どうして……？

そう考えていく内に、いくつかの考えが1つの事実にとどり着いた。俺がシャルのことを好き？

そこまで考えついた時、最後のはまらなかったパズルの一ピースがはまった。

俺はシャルのことが好きになっていたのか……

自分の中でそれを自覚する。となりのベッドに居る彼女を見ると、たまらなく愛おしく感じる。

これが……恋か……

ふと思い立ったようにベッドから抜け出す。向かう先は隣のベッド。そこからシャルの顔を覗き込む。その距離は五センチも無い。そこでサイキは鼓動が早くなるのを、顔が熱くなるのが分かった。それで今度こそ確実に確信した。俺はシャルのことが好きだ。

「俺は君のことが好きになったみたいだ……」

そしてサイキはシャルの唇にキスをしようとして止めた。

「これは想いが伝わった時だな……」

そうつぶやいて額にキスをする。

その後サイキは、足早に自分のベッドに戻って、眠れない夜を過ごした。

## 偽名と告白（後書き）

どうだったでしょうか？

こういうのは書いたことがないんで、感想とかあったらよろしくお願ひします。

次は外伝入れる予定です。

感想・アドバイス等何かありましたらよろしくお願ひします。

## お誘い（前書き）

23話です。

今回は外伝にしようと思ったんですけど、なんか書いてたら長くなってきたので、2話に分けることにしました。  
では、どうぞ。

## お誘い

朝起きると、まだ5時だった。昨夜あんなことがあったが、どうやらきちんと眠れたようだ。

まだ朝食までには時間がある。2度寝するかな〜などと考えていると、隣がないことに気づいた。

ベットから起き上がり、あたりを探すと、すぐに見つかった。

シャルは、2つのベットの間に自分のシーツを巣のようにして、その中で眠っていた。まるで小動物のようだ。

シャルつて意外と寝像悪いんだな・・・

新たな一面を発見した後、サイキは着替えを済ませます。とは言っても、戦闘を行う訳でもないのでもいつもより軽装だ。いつもも速度を重視した装備なので、見た目は服と大差変わらない。しかし、要所要所はきちんと固めている。今の服装はそれらを外したのものになっている。

次に細剣をつけていくかどうか迷った。いざという時には魔法も使えるが、どちらかと言ったらサイキは剣主体の魔法剣士だ。常日頃から魔法を練っているわけでもない。

迷った挙句、これは持つていくことにした。

鞘から細剣抜いてみる。刃がきらりと太陽の光を反射して輝く。

この手で、守れるように・・・

この細剣とも長い付き合いになる。しかし、最近力不足を感じてきた。実力は落ちていない。それでもシャルを守るためには、今までの力じゃ足りない。

そんなことを考えていると、時計の針が朝食10分前を指していた。細剣を鞘にしまうと、シャルの元に向った。

「シャル、朝だぞ〜」

返事はない。規則正しい寝息が響くだけだ。

「あゝい」

再度呼びかけてみるが、一向に起きる気配がない。仕方がないので、肩のあたりを揺さぶってみる。

「そろそろ、起きろよ〜」

「うにゅ・・・」

シャルが顔を持ち上げる。寝ぼけた目で虚空を見つめていたが、こちらに顔を向ける。

「おはよ」

眠たそうに目をこすりながらシャルが起きてくる。

「あ、サイキ、おはよ〜」

「早く準備しろよ、そろそろ朝食だぞ」

「ふあゝい」

まだ寝ぼけている。シャルは朝に弱いようだ。

シャルの準備が終わるのを待って、下に降りたところで、皆と合流した。その後軽い朝食を済ませる。

「具体的には今日は何を買った？」

二ムが答える。

「食料や水などの基本的なものと、これまでの戦闘で消費したものにこれから必要なものですかね。昨日分けておきましたんで、これをお願いします。後、自分が買うものを買えばいいんで、あとは夕方まで自由行動ということだ。」

そう言っただけで、一人一人に紙を渡してくる。中を見ると、ここの地図と担当するものが書かれていた。

俺が買うものは防寒具か・・・

明日から向かう氷の城のためだろう。となると、部分部分を温めるものではなく、体全体を寒さから守るものがいいたろう。そこまで考えて、シャルに話しかける。

「シャルは何だった？」

「私はポーシヨンとかの消費アイテムだよ。」

ざっと、地図を確認してからもう一度話しかける。

「あのさ、どうせならいっしょに行かないか？」

「え？」

「あ、別に変な意味があった訳じゃなくて、ただ単に場所が近いし、おれの担当が防寒具だからローブかなんか買おうと思うんだけどシャルのサイズ知らないしさ。」

早口で訳を言いきる。体温が若干高くなったのを感じた。

「うん、いいよ」

シャルからあっさりと了解が出る。  
いつの間にか辺りにはサイキとシャルだけになっていた。

## お誘い（後書き）

次回はデートってことで。

感想・アドバイス等何かありましたらよろしくお願ひします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3304s/>

---

疾風の翼

2011年10月8日22時48分発行